

目次

はじめに

一 調査動機・経過

二 発掘調査経過

三 遺構の概要

四 遺物の概要

五 周辺諸窯との比較

おわりに

はじめに

本報告で取り上げる「今津茶碗山窯」(以下「茶碗山窯」)①は、滋賀県高島市調査当時は高島郡(今津町)大字日置前に所在し、弥生・古墳時代と近世の遺構を有する複合遺跡「妙見山遺跡」に存在する連房式登窯跡である。旧今津町教育委員会以下「町教委」と略により本門佛立宗・佛立センター建設の造成工事に伴う妙見山遺跡の発掘調査が昭和六十二年(一九八七年)度から平成元年度(一九九〇年)度に実施された。平成十年(一九九七年)三月三十一日に遺跡全体の調査概要報告書である「滋賀県高島郡今津町 妙見山遺跡発掘調査概要報告」②(以下『概報』)と略が刊行され、筆者も依頼されて茶碗山窯の概要を執筆した。「茶碗山」の名は当該地を掘ると茶碗が見つかることから地元の人が「ちゃわんやま」と呼んでいたことに由来する。旧今津町内唯一の登窯跡ながら関連する文書、言伝は全くない。窯跡は本門佛立宗・佛立センター構内に現状保存されている。

なお、筆者は発掘調査には参加していないので検出遺構の記述については、調査日誌と調査担当からの聞き取りによっている。

一・調査動機・経過

筆者は昭和六十三年十二月二十七日に発掘調査中の当該窯跡を見学し、江戸時代の信楽窯跡に比して規模の小ささに少なからず驚き、後日、出土品を実見した折には高級そうな食器

が大半で雑器がほとんどないことに改めて驚いた。窯跡・周辺・廃棄土坑の発掘調査が実施され、出土遺物全てが取り上げられることも魅力的であり、湖西の一隅に密やかに煙を上げた窯について「町教委」の整理調査とは別に個人的に調査・分析しようと、調査担当者に許可をいただき、出土遺物全体量の把握と遺物群の構成を確認するため、平成五年六月二十一日から二十二回今津町内の遺物保管場所に向いた。そこでは洗浄・注記済みの出土遺物を観察・分類し、匣鉢・碗・皿等で口縁、底部が全周の三分の一以上残存しているものは、推定口径、推定底径を割り出した。データは手書きで記録し、平成七年十月九日に遺物全点のデータ取りは終了した。

それ以後は、「町教委」の調査の進行に合わせて、記録データを整理し、接合・復元済遺物データの検討も行う計画があったのだが著者の怠慢や転職により調査は中断してしまった。

一九年後の平成二十三年になり筆者はようやく活動を再開した。まず、旧遺物データの EXCEL 入力を行い、高島市教委から借用した図面類をスキャンし、デジタルトレース・製図を行った。二三年は二日間、二四年は四日間、高島市文化財収蔵庫に向き、「概報」掲載遺物と線描きがある窯道具を熟覧し、写真を撮影した。

はじめ報告には「接合・復元済遺物」全点を熟覧して記録した新データと旧データ(洗浄・注記済データ)の両方を使う予定であったが、熟覧、記録だけで数年間かかり、報告がさらに遅れてしまうので、不十分ではあるが旧データのみを用いることにした。

報告の主体目的は自身の未熟さもあって『概報』で十分記述できなかった「遺構の詳しい検討」「遺物の分布状況」「線描きのある窯道具の紹介」とした。また、一九年の中断の間に滋賀県内では近世・近代の登窯跡の発掘調査件数が増えたので、「周辺諸窯」の遺構形状・出土遺物の比較についても記述することにした。執筆には約二年間を費やし、平成二十六年三月によく脱稿した。

二、発掘調査経過

茶碗山窯跡が確認されたのは妙見山遺跡調査中の昭和六十三年十二月十四日である。発掘調査は、①連房、②窯跡周辺、③遺物廃棄土坑の順に進められた。窯跡の性格を知る上で必要であるので、調査担当者の記した調査日誌をもとに発掘調査経過を簡単に紹介したい。

・連房

昭和六十三年十二月二十四日から表土除去を開始、翌昭和六十四年一月五日に最上部の六室から検出を開始し、同日床面・窯壁を確認している。検出作業中の一月八日に平成改元が行われたが、調査は滞りなく進み、平成元年一月三十一日には焼成室と燃焼室の「第一次遺構面（第一次遺構面上に粗い砂と窯道具等でかさ上げして造られた面―上面と）」「第一次遺構面（窯造成時床面―下面）③」を確認し写真撮影を行い。二月十七日から二十一日までの間の四日間、平面実測図等の図面作成を行った。掘削箇所が遺物廃棄土坑に移っていた三月十六日、十八日に第二次遺構面上で出土した遺物の取上げを行い、三月二十日、二十一日の二日で窯跡の清掃を行っているが、この折に「二次遺構面」は除去されたようである。

・窯跡周辺

一月二十六日から二月二十八日まで行われ、三室の燃焼口の南斜面から多数の遺物が出土した。
・廃棄土坑

二月八日から廃棄土除去が行われ、三月二日には二本の断割トレンチを設定し、翌日から掘削し掘方のラインを確認している。三月十日からは土坑内をグリッドに分け掘削を開始し、三月二十八日遺構内を清掃し調査を終了した。

遺構掘削、遺物取上が終わった三月二十日に航空写真撮影が行われ現地発掘は終了した。

三、遺構の概要

(一) 窯跡全体 (図1-3、5)

茶碗山窯は妙見山丘陵内、勾配六度の東側斜面に立地する底辺十二・〇メートル、上辺七・五メートル、高さは一・二メートルから〇・九メートルで西側が崩れている土墳と思われるマウンド上に盛土し築造される(4)。窯体は窯体と窯体周囲の粘土張床面からなる全長約九メートル、最大幅四・一メートル、高さは約一・六メートル、燃焼室と焼成室六室からなる連房式登窯跡で、

各室は窯尻に向かって左側に開口し、開口部の左右にはアーチ状の壁面が高さ〇・二五×〇・三五メートル分残っている。

連房の土量は約五・八五m³である。左側に隣接する遺物廃棄土坑は長軸二二・八メートル、短軸五・五メートル、深さ平均約一・五メートル、土坑の土量は約六・六m³である。二室に開いた穴の断面を見るとマウンドの上に土を敷き、固めることを繰返しながら窯体部分を築製した様子が確認できる。築造時に土が締まり、容積が減ったことを考えると、連房築造時には廃棄土坑掘下げた時の排土を使ったことは間違いなく、廃棄土坑側に開口しているため、窯出し時に出る不良品は焼成口から直接廃棄土坑に廃棄できる。窯室の外側窯壁ラインは燃焼室から三室までは緩やかに広がり、四室以降はほぼ水平に窯尻まで伸びる。

(二) 連房第一次遺構面 (図1-5・16)

第一次遺構面は黒変し固く締った窯床、サマ穴(通気孔)、窯壁、窯体取り囲んでいる粘土面からなる。床が硬化、黒変しているのは、第一遺構眼面が出来た段階で空焼したからではないかと思われる。各室の床は傾斜があり、中央部が少し盛り上がる。室と室の間には煉瓦状窯材(5)が一列水平に据えられて、窯床との間に段差ができる。窯材の上部に隔壁が築かれ、サマ穴が開けられる。室と隔壁、サマ穴の形状から当連房は有段連房横サマ式にあたる(6)。サマ穴は三室までは斜め方向に広がってゆくが、四室以上は一直線上に並ぶ。各室の傾斜は上部ほど緩やで、窯室の平均的な傾斜は十五度である。

・燃焼室 (図1-5)

燃焼室は幅〇・二メートルの焚口と焼成部からなっており、奥行きは〇・八、奥壁幅二・四メートル、一室との境には〇・三五メートルの段差がある。その上に煉瓦状窯材によるサマ柱五本があったはずであるが、窯尻に向かって右端の一本は欠失している。

・一室 (図1-4)

一室は奥行き〇・八二、奥壁幅一・二八メートル、床の傾斜二〇度で二室との境界にサマ柱が六本全て残り、サマ穴は七箇所である

・二室 (図1-4)

一室は奥行き〇・九一、奥壁幅二・一〇メートル、床の傾斜二十度で三室との境界にサマ柱が七本全て残り、サマ穴は八箇所である

・三室 (図1~4)

三室は奥行き一・一、奥壁幅三・四メートルで各室中最も広い。床の傾斜十五度で四室との境界にサマ柱が七本全て残り、サマ穴は八箇所である。

・四室 (図1~4)

四室は奥行き〇・九二、奥壁幅二・五〇メートル、床の傾斜十九度で五室との境界にサマ柱は本来七本あったはずであるが二本は欠失している。

・五室 (図1~5)

五室は奥行き一・〇、奥壁幅三・五五メートル、床の傾斜十八・五度で六室との境界のサマ柱は本来七本あったはずだが、向かって右側が崩れているため三本は欠失している。左から二本目・三本目のサマ柱は上端部の斜面が生きており、最上部の高さが床上〇・四一メートルあり、サマ穴の下部は平らで上部は斜であることが確認できる。

・六室 (図1~5)

六室の奥行き〇・八二メートルであるが、室の右端が崩れているので、奥壁の幅は不明である。傾斜は十七度である。窯尻部分は残りが悪くサマ孔の状態がよくわからない。左から一・二・三本のサマ柱は上端部の斜面が生きており、最上部の高さが床上〇・五三メートルあり、サマ穴の下部は平らで上部は斜であることが確認できる。

最上部はわずかであるが窯壁の立ち上がりが見られるので、窯尻窯壁のサマ孔から直接火煙を吐き出す形状であったと思われる。

(三) 窯跡第二次遺構面

・ 燃烧室 (図2~5)

第一遺構面に粗い砂を三センチ程度敷き、固めた上に窯道具や製品の破片を置いている。窯道具は板(一)二六、方形柱(三)四、匣鉢(九)七点である。遺物上面レベルを測ると最も高いところで一〇七・〇五六メートル、最も低いところで一〇七・〇三六メートルと二センチの高低差しかない。平らな面にすることで薪が燃焼しやすく、燃焼時の高熱から窯体を守る効果があると思われる。製品は筒碗二三点、半球碗三点、灯明皿六点、灯明台六点、深皿二点、鉢二点、その他一七点出土しているが細片が多く、窯道具の間に置かれている。

第二次遺構面の上に堆積した遺物は、匣鉢九六、板二四、方形柱九、粘土塊二点と圧倒

的に匣鉢が多い。

・ 二室 (図2~5)

二室の開口部の近くに〇・四五(短軸)×〇・七五(長軸)メートルの三角形の平坦地として残っている。第一遺構面の上に匣鉢片や煉瓦状窯材片等と粗い砂を用いて、室の上端部で三センチ、下端部で十五センチをかき上げて構築している。最上部には板や煉瓦状窯材を据える。上面七箇所の高さを測ってみると最高一〇七・九九三メートル、最低一〇七・九七三メートルで二センチの高低差しかなく意識的に平坦にしていることが分かる。第二次遺構面構成遺物の内、窯道具は板が八点、板片が五点、匣鉢が一点、匣鉢片が二点、煉瓦が一点、その他三点であるが製品は碗・灯明皿片が一七点で極めて少ない。

第二遺構面より上に堆積した遺物は匣鉢三五六、板四五点、方形柱二点、その他二八点と圧倒的に匣鉢が多い。

・ 四室 (図2・3・5)

四室には粗い砂の上に板と匣鉢が一個ずつ置かれる。匣鉢は初めに据えられた位置から移動していると思われるが、板は、粗い砂が六センチ程度敷かれた上に置かれており、面はやや下に傾いているが、二室の第一遺構面上面の板出土状況と似ており第一遺構面の遺物として確認できるものである。

・ 一室、三室、四室、六室

これらの室では第二遺構面を構成する粗い砂は検出されているが、遺物は何れも焼成時に据えられていた位置からかなり下方に動いており、明確な遺構面は確認されていない。

(四) 遺物廃棄土坑 (図1・4・5)

遺物廃棄土坑は遺構上場の長軸が二・八、短軸五・五、深さ約一・〇〜二・二メートルで斜面を水平に抉るように掘られている。当初遺構内部には腐葉土が堆積していた。遺物包含層は中心部にある長軸一〇・七五、短軸三・〇、深さ〇・一〜〇・二メートルの二番底中の堆積土である。中でも地山上に三・〇〜五・〇センチ上に堆積した黄灰色土層(最下層)に張り付くよう出土している遺物が半分近くを占める。

(五) 窯跡周辺 (図1・4)

窯が築かれているマウンドの中では窯跡と廃棄土坑の間の斜面に遺物が散布している。出土遺

物の大半が三室南斜面から出土している。

(六) 遺構まとめ

当該窯は既存のマウンドに隣接地を掘下げて出た土を盛りあげて造られた窯である。「窯主所有地が当該地に限られていた等の理由で仕方がなく当該地に築窯したかもしれないが現地形を利用して築造する一般的な登窯に比べて労力や時間のかかる窯であることは間違いない。

また、第一次遺構面の急斜面に置いて、その上に匣鉢を積上げることが可能な「接地面が斜めになる焼台」の出土がなく、全室で二次遺構面を構成したと思われる砂が検出され、匣鉢も出土することから、全室の第一遺構面を窯道具と砂で床面をかき上げし、第一次遺構面を造ったことは間違いないようだ。しかし、周辺諸窯のように当初から各室床面の傾斜を緩くすれば第二次遺構面を造る手間はかからないのになぜこのようにしたのか、理由が分からない。

室間のサマ穴について「概報」には横サマ構造と記したが、窯跡一・二室間のサマ穴と二室第一次遺構面の関連を検討すると、そうとも言い切れない。残存する第一遺構面が非常に狭いため窯構造の全容解明することは難しいが、考えられることを以下に述べたい。

二室第二遺構面の上面は一・二室間サマ穴の最上部より下になる。そうするとサマ穴構造は縦サマとも横サマともいえない中途半端な形になってしまう。瀬戸の連房式登窯で見られる縦サマ構造はサマ底部から床面の開孔部までを長くすることで炎の「引き(10)」を強くし炎の勢い強めている。しかしこのサマ穴では「引きがきかないため、勢のよい炎が通らず、温度が上がらない。窯壁の硬化があまりなく、製品の焼成不足が多いのも焼成温度不足が原因ではないかと思われる。

四. 遺物の概要 (表1・2)

出土遺物は整理用コンテナで百十箱、総遺物点数は二二七五点だったがこれは近世窯跡の出土遺物としてはかなり少ない。窯道具の総数は六七七〇点、製品は五五〇五点である。連房内出土遺物の内訳は窯道具三六九〇点、製品二二六一点、廃棄土坑内では窯道具二六八六点、製品一〇八三点、窯跡周辺は窯道具七九四点、製品三二六一点が出土し、周辺出土遺物の八七パーセントにあたる三四五九点が三室南斜面で出土している。連房内でも三室が最も面積が一番広いので生産量も多く、三室入口から廃棄土坑に続く三室南斜面の出土品が多いのかも知れない。

遺物は、欠損により寸法が分からないもの以外、可能などころは全て測ったが、大半が不良品

で口縁の歪や、傾き(たれ)などにより、完形品であつても正しい寸法が分かりにくい遺物もある。寸法を推定する場合は匣鉢や碗・皿・鉢等であれば口縁・底部の1/3以上が残るものを対象とすることにした。口縁から底まで残り、歪みや傾きのないものに限り器高を測った。また各器種の特徴を示すために「概報」掲載の遺物実測図中から調整がよく残るもの、独自性のあるものを選んで掲載した。

なお、前述の通り使用データは「接台・復元済みの遺物」が対象ではないので茶碗山出土遺物の器種別総点数を復元する基礎データには不適當であるので、当該データを出土遺物全体における各器種の構成比や同じ器種内の寸法の大小、出土地点の分布傾向を知るために用いた。

(一) 窯道具

・匣鉢 (図6・13、表2・3)

遺構全体から出土する匣鉢は認識できる小片も含め五七三三点である。その内連房各室内から出土窯道具総数二六九〇点中の匣鉢は三〇六一一点で匣鉢の割合は八三パーセント。廃棄土坑出土窯道具総数二二八六点中の匣鉢は二〇三三点で匣鉢の割合は八八パーセント。窯跡周辺出土窯道具総点数は七九四点中の匣鉢は六三九点で匣鉢の割合は八〇パーセントである。出土窯道具全体でも窯道具に占める匣鉢の割合は八五%と圧倒的に高い。

匣鉢は、口径、底径とも一五・〇、一六・〇センチのものが多い。器高は九・八センチから一四・四センチまで一種あるが、概ね一一・〇センチから一一・五センチの中に納まるものが多い。しかし、器高が六・三、六・四、七・〇センチと低い一群もある。

口縁の一部に長さ四〜六センチ、幅一〜一・五センチにわたって抉りたる「エグリ」(図六・図二二)は、匣鉢完形品、口縁、口縁片の合計三三八点中一六四点で確認された。エグリは焼成時に膨張した匣鉢内の空気を外に逃がす役割があるといわれているが、完形品でエグリがないものもあり、その機能ははっきりしない。

・板 (図6・13、表2・4)

板は一般的には最下段の匣鉢の下に敷くために使われるが、当該窯では第一次遺構面をかき上げ資材にも使っている。板は窯跡・廃棄土坑・周辺それぞれ二七六・七五五・三三一点が出土している。各地点の出土窯道具に占める割合は〇・〇七五パーセント、〇・〇三三パーセント、〇・〇三九パーセントと何れも一%以下で匣鉢に比べるとはるかに少ない。器形は大半が正方形で、

「長方形と確認できる例が僅か三点ほどある。寸法は七・五センチ角のミニチュア品のようなのが一点あるが、それを除くと一辺二三・〇センチから十九・五センチまであり、一七センチ台が多い。厚さは一・四センチから三・五センチまでで、大きさと厚さの関連性は特に無い。

調整が確認された破片一八九点の中では片面に骨目を有するもの(図6・50)が五四点と最も多く未調整のもの(図6・46)が三三三点、そのほか放射状の刻印を持つもの(図6・47)が二五三刷毛目・ケズリ(図6・48・49・51)・ヘラメ・指圧痕・ナデ消が一点ずつある。両面に骨目を残す板は無い。調整の種類と大きさ、厚さの相互の関係を探ってみたが、関連性を見出すことは出来なかった。

・方形柱 (図7・16、表2・5)

方形柱はきちんとした四角柱と片方が開く台形柱の二種がある。図7の写真を見ても分かるように大きさは様々である。どちらか一方に匣鉢の粘土塊を付着させるものが多い。板同様、第一室の第一次遺構面の竈床をかき上げる資材として用いられている。連房からは二五点出土しているが、三室から五〇点と四割が出土している。三室兩斜面からも一点が出土している。

・粘土塊 (図7・16、表2・5)

粘土塊は不定型で片方が方形柱と繋がり、反対側には匣鉢の胴部に貼り付けたように屈曲し、匣鉢の調整痕・轆轤目・傷が写し取られていることが多い。粘土塊はその形状から行って、竈壁と積み上げた匣鉢、隣接する匣鉢間の倒壊を防ぐ支えとして方形柱とセットで用いられている。

・ワドチ (図7、表2)

ワドチの出土は極めて少なく、竈跡では一室一点、二・三室で五点ずつ、土取坑では一点周辺では二点が出土している。底径二〇センチ程度の大型のものと底径四センチ程度の小型のものがある。大型のものは靱痕がある。大型のものは鉢、香炉などの製品用で、小型のものは碗・皿用と考えられる。香炉の底に熔着するワドチで長楕円形の例がある。

・靱痕円盤 (図7、表2)

靱痕円盤の出土もきわめて少なく、二・三室で二点ずつ、廃棄土坑で二五点、周辺で二五点出土している。口径七・五センチから九センチ、厚さ一・五センチ程度で表裏全面に靱殻紐が付着する円盤である。一面に直径七・五センチ程度の高台痕があることから香炉などを載せた竈道具であることが分かる。

・針ピン (図7)

針ピンとは一般的には碗・皿を重焼させる際、熔着しないように高台と底部内面に三点程度挟む小さな円錐形の竈道具である。当竈跡からは珍しい四角錐の針ピン一点が三室床面直上から出土し、出土地不明の三点と合わせて四点が確認されている。

・煉瓦状竈材(図7、表2)

上部構造がほとんど亡失している当竈では竈の上部構造の構築材である煉瓦状竈材(トンバリ)が、廃棄土坑等に大量に存在するはずだが、なぜか破片も含めて二四点ほどが竈室と廃棄土坑から出土しているだけである。縦四・四〜二・七センチ、横八・五センチ〜三・〇センチで長さは一六・〇センチと一九・〇センチのものがある。築竈には様々な大きさの個体が用いられたことが分かる。

他には、色見穴の蓋円錐形が二点出土している。

・線刻のある竈道具(図7・8、線1〜7)

8・線1・2は煉瓦状竈材で六室のサマ穴の際から出土している。縦七・三センチ、横一・七で寸法が一致するので寸法も同じと思われるが、両方とも欠損があるため全体像は不明で接合もしない。1には「銀之・」という文字がある。

2には右「銀之助あほ」左「銀之助あ保」の文字がある。左の「保ほ」字は「呆ほ」と音通しており「あほ」と読まれた可能性もあるが、左は「あほ」であるので左右同じく「あほ」と読まれたかもしれない。

松本 修(11)によると「阿呆」という漢字は近世上方文献で古くは(斎藤徳元天之二紙・寛永二年・一六三四)に記載があり、「あほ」という言葉は、宝永元年(一七〇九)に京都で出された雑俳集『軽口頓作』に初出があるが、京・大坂で一般化するのには安永年間(一七七二〜八二)以降としている。近江で「あほ」が使われたのも一八世紀後半の以降の時期であろう。

8・線3・4は板である。線3の出土地点は不明、縦七・五センチ横一三・一センチで面長で烏帽子を被り、袖を大きく上げる人物が線刻される。烏帽子は中・近世に多い菱烏帽子である。8・線4は廃棄土坑から出土している。大きな欠損があるので寸法は縦六・九センチが確認できるのみである。線3と同じ容姿で同じ所作の人物の左半身が線刻される。不格好な烏帽子を被り、袖を上げておどけたポーズをとるこの男こそ「あほの銀之助」ではないか？

8・線5は出土地点不明。縦八・〇センチ横二二・〇センチの板に男根がかかっている。
8・線6は廢棄土坑から出土した底径一四センチの匣鉢で女陰が線刻される。男根と二つセットになるので「陰陽合一して生命生産音が生まれる」という意味があるものかもしれない。
8・線7は廢棄土坑から出土した横が七センチの煉瓦状窯材片である。「松」一字が線刻される。他に文字・線刻のあるものは二点ある。しかし、文章の意味や、線刻の範囲がよく分からないものは今回紹介していない。

(一)製品 (図9～14、表1・表2)

製品も三出土地点窯跡・廢棄土坑・周辺別に取上げられたが、実際は出土地点が離れた遺物が繋がった例があり、三出土地点それぞれから出土した破片三点が繋がった例もある。窯道具と違い製品は軽いので移動しやすく、廢棄後に天井が壊れ窯床がむき出しになり、風雨の影響で流れたのだろうか。出土製品の形状・製作技法については『概報』で報告しているので、本報告では特に意匠について詳しく記述したい。

・筒碗 (図9・1～5、図10、表2)

遺構全体から出土する筒碗は二六九点で、出土製品全体の四・九%にあたる。

口径は七・一から九・〇センチの一〇種、器高は六・一から七・二センチまで六種ある。しかし、焼け歪みによる口縁の変形する遺物が多いのであまり参考にならない。逆に底径は五・一センチから五・六五センチまでの五種しかなくほぼ寸法が揃っている。底部の器厚は大半が〇・三センチ程度で、〇・五五センチの例もあり厚手で持ち重りがする。(1～4)の松絵の描順は褐色(松の枝)→緑松葉→釉である。釉はよく熔けず白濁して分厚く残っている。底部外面のみが露胎である。筒碗の形状は、畑中英一氏の信楽編年による4期古段階(一八世紀第3四半期、中段階)一八世紀第4四半期、新段階(一九世紀前半)に信楽窯群で生産された筒碗に類似している。(12)・半球碗 (図9・6～10、図10、表2)

遺構全体から出土する半球碗は六一六点で、出土製品全体の一〇・一%にあたる。

口径は八・二から二〇・八センチまでの九種、底径は三・一から四・二センチまでの八種ある。しかし、焼け歪みによる口縁の変形する遺物は筒碗より多いのであまり参考にならない。器高は六・二から六・九センチまでの九種とほぼ寸法が揃っている。底部の器厚は大半が〇・三程度で〇・五五センチのものもあり、全体に厚手で持ち重りがする。白土・緑色と褐色の顔料で二輪並

んだ菊花を描くもの(6)が、松絵(9)、梅絵(10)がある、菊絵(6)の描順は白土(花びら)→緑花(芯)→釉である。釉は熔けず白濁して分厚く残っている。底部外面のみが露胎である。

半球碗について信楽窯群では半球碗が4期古・中・新段階に信楽窯で作成されており(13)、その中でも口縁部に向かって抱え込むような形態をとる勅旨支群の半球碗と形状が類似している。(14)畑中英氏は勅旨支群で主体を構成する半球碗が大津市上田上牧へ搬出されていることを述べている(15)が、茶碗山窯でも半球碗を作成する際、手本にあつたのは勅旨支群の半球碗であつたことが言えるのではないかと思う。(図18)

・深碗 (図9・11、図10、表2)

出土例が少なくはつきり確認できるものは一点のみで、2室と6室から同一個体が出土し接合・復元されている。口径九・一センチ、底径三・四センチ、器高六・九センチで楕円は無い。釉は熔けず白濁して分厚く残っている。底部外面のみが露胎である。類似した丸碗が同時期(4期古・中・新段階)に信楽窯で作成されている。(16)

・広東碗 (図9・12、図10、表2)

はつきり確認できるものは一点のみで、燃焼室から出土している。口径二二・五五センチ、底径六・五センチ、器高六・三センチで外面には緑が酸化により赤く変化して残っているが、なごを描いていたかは分からない。釉は熔けず白濁して分厚く残っている。厚手で持ち重りがし、底部外面のみが露胎である。

・端反碗 (図9・13～15、図10、図12・図14、表2)

遺構全体から出土する端反碗は認識できる小片も含め二五点と非常に少ない。製品全体に占める割合も一パーセント以下である。

口径は九・九から二一・四センチまでの四種、底径は四・〇から四・八センチまでの三種、器高が六・〇から六・二センチまでの二種と寸法に大きな差はない。底部の器厚は底部の残存している遺物が少なく、計測可能なものが一点しか無いが一・六センチもある。他の遺物も厚手で持ち重りがする。白土と緑色と褐色の顔料で菊花と葉をあわせて描くもの(15)また褐色で八重菊を描くもの(14)がある。描順は褐色(葉)→白土(花びら)→緑葉→施釉である。釉は熔けず白濁して分厚く残っている。底部外面のみが露胎である。類似した丸碗が同時期(4期古・中・新段階)に信楽窯で作成されている。(17)

・深皿(図9・16～19、図11・20、図10・14)

十坑で九点、周辺で四点と僅かしか出土していない。口径は二二・一から二三・九五センチまでの七種、底径は四・九から六・四センチの六種と寸法にばらつきがある。器高は四・〇から四・九センチの四種と比較的揃っている。

文様は網干文と松文に別れる。網干文9・16・17は褐色で描かれ施釉される。松文はまず内面と口縁・体部外面に白化粧を施した後、褐色→緑→釉の順で描かれる。釉は熔けず白濁して分厚く残っている。底部外面のみが露胎である。

・鉢(図11・21)

出土例が少なくはつきり確認できるものは二点のみである。21は三室から出土し、の口径は一二・六〇、底径五・七、器高六・七五センチ。もう一点は四室から出土し、同一二・九五センチ、五・七センチ、器高六・六センチで大きさは似かよっている。外面は釉が完全に剥落しており、釉の種類、文様は不明である。

・大鉢(図11・22～26、図11)

遺構全体二二五点出土しているが廃棄土坑が二〇九点と多い。口縁部が歪むものが多く正確な口径が分かりにくい。口径は一六・六五から二〇・〇センチまでの六種、底径は六・〇から一〇・四センチまでの七種、器高は八・〇から一〇・四センチまでの四種がある。口縁は外反する例(22)、内湾する例(24)、外反して口縁端部が肥厚する例(23)の三種がある。

22は、白土→緑の順で不均等に流し掛けをして最後に施釉するが、釉は熔けておらず大部分で剥落し一部しか残っていない。23は窯跡・廃棄土坑・周辺の三箇所から出た遺物が繋がっており、内面と口縁・体部に白土を掛けてから施釉する。釉は白濁しているがよく熔けていて固い。24は白土と緑で文様を描くがぼやけており、緑の部分は酸化して暗赤色になっている。釉も熔けておらず大部分で剥落している。25は厚手・無釉で底部に糸切痕を残す。当該窯では粗製につくられた唯一の製品である。26は外面に緑→茶→施釉の順で柳模様を描く。釉の剥落が多い。

・香炉(図11・27・28、図13・29～31、図12)

遺構全体からは五二点出土している。口径は九・六～一一・一センチまでの五種、底径は九・六五～一一・三センチまで五種、器高が八・五から九・一センチまでの五種ある。口縁がすばま(27・28)以外にはほぼ筒型で底部は基筒底状である。釉が剥落しているものもあるが、当初

は全てに白化粧がされていたと思う。釉はよく熔けておらず白濁している。27はまず片彫りの凹線を重ねて遠山を一箇所描き、白化粧した上に緑を塗っている。このようにすると線が薄く透けて見える効果がある。本来緑色に発色するが酸化のため暗赤色に発色している。高台内に靱痕の付いた棒状のトチンが付着している。28は無模様だが白化粧の上に施釉している素地と白化粧、白化粧と釉の境がはつきり分かる。29も白化粧の上に施釉されている。30は27同様片彫りの凹線を重ねて遠山描き、白化粧した上に緑を塗られたはずだがほとんど残っていない。釉も薄くしか残っていないことから剥落したと思われる。27と違い遠山は、低いものを加えて四カ所描かれている。31は縦に片彫りの凹線による縦縞模様が描かれた後、白化粧し施釉される。釉は熔けておらず剥落している箇所が多い。

・灯明皿(図13・32～37、図14)

遺構全体からは五七三点出土しているが、三室南斜面が三七八点と非常に多い。口径は一一・五五から一二・五五センチまでの七種、底径は四・四から五・五五センチまでの三種、器高は一・六から三・四センチまでの五種ある。内面の調整は菊型の浮文を貼りける物(32)が二点、丸い浮文のもの(33)が一点、刷毛目のあるものが一五点ある。刷毛目も細かい単位のもの(34)、粗い物(34・35)、不定形な刷毛目のもの(37)がある。内面と口縁外面に施釉する例が多いが、釉はよく熔けず剥落している例が多い。

・灯明台(図13・38・39、図14)

二二〇点出土しているが、灯明皿と同様周辺の三室南斜面出土例が一四四点と非常に多い。口径は一一・四五から一二・〇センチまで五種、底径は七・〇から八・〇センチまでの五種、器高は二七から三〇センチまでの三種である。受部端部の高さが口縁端部の高さより僅かに低い。釉はよく熔けず、剥落しているものもある。内面と口縁端部外面に施釉される。

(三)遺物まとめ

匣鉢の大きさは口径一六・〇～一七・〇センチ、高さは一〇・〇～一一・〇センチのものが多く、ここには口径七・〇～一一・〇センチの碗類、一〇・〇～一一・〇センチの香炉が収められる。口径・底径が同じで器高が六・〇～七・〇センチの低いものには口径二二・〇～一四・〇センチで器高は三・〇～四・〇センチの深皿や灯明皿も入れられたのであろう。大鉢は収まるサイズの匣鉢が無く、剥き出しで焼成されている。碗・皿類に重焼きの痕がなく、重焼きに用いら

れる針ピンも僅か四点しか出土していないことから、当窯では重焼きは僅かだけ実験程度におこなわれ、一匣鉢に一遺物を入れるのが基本だったのであろう。

匣鉢以外の窯道具は窯道具全体の1%以下と圧倒的に少ない。板や方形柱など第二遺構面のかさ上げに用いられた道具が少ない。五室には僅かであるが第一遺構面のあるのだが、五室・六室は板・方形柱の出土が特に少ない。下方に流れて落ちたのだろうか？しかし、匣鉢は不思議なくとに一・二室より多く出土している。

当窯出土遺物のうちたいへん珍しいものとして線刻のある窯道具がある。他窯では窯記号や屋号にあたる線刻や刻印が多い。当該窯では煉瓦状窯材に刻まれた「松」字(図8・線7)がそれにあたるが、その他はふざけた内容である。

製品全体を見ると、底部外面に糸切痕を残すような粗製品はきわめて僅かで、大半は丁寧に造られた高級品である。個別器種を見てゆくと大鉢(2)は外面に白土と緑釉を流しがけする意匠が独創的である。他の大鉢は食物を盛つたり、杯を浮かべたりする時に内部も美しく見せるために内面も白化粧されている。深皿も網干文の二点は侘びた風情を出すためにあえて素地を出すのが、松文を描くものは絵を際立たせるために白化粧を施す。以上のように当該窯の製品は視覚的効果を見込んで製作されている。しかし、焼きが甘いせいもあるが、京焼、信楽焼の食器類と比べると全体に厚手で文様もぼつたりとしており洗練されている印象はない。

なお、流し掛けや白化粧に用いられた白土は、「化学分析の結果、高島市周辺地域に堆積する白谷火山灰の可能性が高い土と採取地が分らない土の二種がブレンドされた可能性がある」という報告がある(18)。白谷火山灰単味で用いるより調査した方が有効であったのだろうか。

五. 周辺諸窯との比較

茶碗山窯の地域性・時代性を考察する比較対象として滋賀県内で発掘調査が実施された一八世紀後半以降の近世・近代連房式登窯をあげた。内訳は甲賀市信楽町(旧甲賀郡信楽町の五室跡)漆原C・牧西二・三号、長野東出一・二(豆)(19)、東近江市(旧蒲生郡生町)石塔窯(20)、野洲市旧野洲郡野洲町岡田斉造窯(21)である。

上記の窯跡の内、漆原Cと岡田斉造窯は窯体とその周辺の発掘調査、長野東出一・二号は窯体の発掘調査が行われた。牧西二・三号は窯体の調査が実施されたが、調査目的が範囲確認だった

ため、床の最下面まで掘下げていない。石塔窯は窯体の一部と物原の一部しか発掘調査されていない。以上のように発掘調査といっても各窯跡によつて内容に違いがあり、遺物の分布や出土量については同じ条件で比較することはできない。(表6 滋賀県内発掘調査実施近世・近代窯跡一覧も上記の条件下での一覧表であることを示しておきたい。

(二)遺構面(図15・16、表6)

・規模・形状

茶碗山窯の規模は、信楽五窯や近代窯である岡田斉造窯に比べると小さく、石塔窯に近い。大量生産した製品を全国に出荷する信楽諸窯の規模は相対的に大きく、地域に単独で存在した窯の規模は小さいことが確認できた。一八世紀代の信楽窯牧西二号・牧西三号窯は長さ比べて幅が狭くスリムであるが、江戸時代末期になるにつれて、中頃から窯尻にかけて室の幅が広まり、全体に太短くなる傾向がある。茶碗山窯の形状は長野東出一号窯に似ている。

・築窯場所

信楽五窯、石塔窯が勾配二〇度程度の自然の傾斜を利用して築窯されているのに対し、茶碗山窯は古墳上に築窯している。県内の窯跡では岡田斉造窯の二室から窯尻までが地表面より高く盛り上がっているが、同窯は明治三〇〜四〇年代に移動した窯で築造も近代的な工法で行われたと考えられるので比較は難しい。江戸時代は古墳や堤防の斜面を利用して築造した窯(2)があるが、地面より上に土を盛って築造された登窯は少ない。数少ない例として削平されているが大阪市の堂島一号窯(23)の三室より窯尻側が盛土による築造であったことが知られている。

・床砂

各室に敷かれた砂は、部分的な調査しか行わなかった石塔窯以外全ての窯で確認されている。長野東出一・二号では煉瓦状窯材で床が敷かれその上に砂が敷かれる。しかし、これらの窯は各室の平均斜度が一〇度以下、砂床に直に匣鉢を積上げて安定するが、茶碗山窯至床の傾斜は最大で二〇度、最小でも一四度あり、窯道具を重ねその間に砂を入れてかさ上げしてはじめて匣鉢が置ける平坦面を確保できる。

・サマ穴構造(図16)

信楽五窯、石塔窯、岡田斉造窯の隔壁は「有段横サマ」である。茶碗山窯の第一次遺構面は、段といつても煉瓦一個分の高さしかないが「有段横サマ」である。しかし第一遺構面の上面は一・二

室間サマ穴の最上部より下になる。そうなるにサマ穴構造は縦サマとも横サマともいえない中途半端な形になってしまふ。

(一)遺物図17・18、表7

・竈道具表7・1

茶碗山窯出土竈道具の内、何れの竈跡でも多く出土するのは匣鉢である。信楽焼諸五窯も匣鉢が竈道具中で圧倒的に多い。板も全ての窯で出土している。方形柱のような用途の竈道具は茶碗山窯以外にはない。ワドチは漆原^cで出土しているが、靱痕円盤の出土は無い。針ピンは石塔漆原^cで出土しており、漆原^cでは明治二年の刻印がある針ピン製造判も出土している。また、窯印や屋号の入った竈道具は漆原^c、長野東出一・二号、石塔、岡田奇造窯で出土しているが茶碗山窯出土品でそれに類するものは「松字」を刻む煉瓦状窯材一点のみである。茶碗山では敷皿、焼台が見られず、当然、土鍋の焼台など茶碗山で生産されない器種の竈道具も無い。また県内諸窯では蛸足ハマヤトチン等の九州形系竈道具が無いことから九州系竈業技術の導入がなかったことが確認できる(24)。

・製品図17・18、表7・2

製品を大きく食器・調理具・煮炊具・貯蔵具・灯火具・その他日常雑器の六区分に分けると、茶碗山窯で生産される器種は、食器・貯蔵具・灯火具の三分がかり、調理具・煮炊具、その他日常雑器がない。器種も碗・皿が中心の九種である。信楽五窯では、牧西窯一・三号窯の出土器種が少ないが、これは範囲確認調査のため物原窯道具・失敗製品の廃棄場所の発掘をせず、床の最下面まで掘っていないので出土遺物が少ないという理由がある。

長野東出一・二号窯では六区分全てが出土し、幕末から明治にかけて稼動した漆原^c窯も六区分の製品が見られ、器種も多く、「その他の日曜雑器」にも珍しい「小鳥の餌入れ」が含まれる。

石堂窯では信楽諸窯でよく見られる小杉碗(25)を生産せず、茶碗山窯の片切彫文様の香炉と同技法の香炉が生産されるという共通点がある。しかし、両窯で生産される碗類一器種筒碗・半球碗は、茶碗山では白土や茶、緑を使って彩色されるが、石塔窯では褐色による単純な圏線文しか施されない。また茶碗山窯にはない土瓶・土鍋などの煮炊具が生産されるという相違点もある。石塔窯では同物原には数十トンもあると思われる大量の不良品が堆積しており、多年度にわたり生産が続いたことも茶碗山窯と違つ。

岡田奇造窯は、現在に至るまで営業が続いている近隣の店の屋号の入った茶碗類などを作っており地域に根ざした窯である。

(二)遺構・遺物の特徴から見た窯の操業年代と性格

茶碗山窯の形状は長野東出(三)一、九世紀後半の窯に似ているが、周、辺諸窯に見られない特殊な構造があり比較の対象とするのは難しい。

出土遺物の年代については、茶碗山窯出土の筒碗・半球碗・端反碗に類似する碗が信楽では畑中英一氏の信楽編年(26)による4期上段階(一八世紀第3四半期、中段階(一八世紀第4四半期、新段階(一九世紀前半)の時期の窯跡から出土すること。出土遺物に一八世紀末から一九世紀始めを上限とする肥前染付磁器の広東碗に類似した碗が出土していること。茶碗山窯製品にみられる片彫文の意匠(27)の出現年代が江戸遺跡では(一七七〇年を中心とした時期とVII期(一七八〇年から一八〇二年)になること、竈道具に書かれた「あほ」という字は京・大坂で一般化するのは安永年間(一七七一―一八二一)以降と推定されていること(28)。以上から窯の年代を一八世紀後半から一九世紀初頭に設定したい。

鉄道が出来る前の今津は、若狭往還と琵琶湖の水運の経由地として繁栄した町である。中山道・東海道分岐点の宿場として繁栄した草津宿の商人が「姥が餅焼(29)始めたように陶器窯の運営を思い立った今津商人がいて、取組んではみたが、築窯や製品の準備に思いのほか金がかかり、焼成も失敗し、廃窯してしまった、という想定を示して結びとした。

六、おわりに

『概報』の原稿については、床面・サマ穴構造の認識が不十分で、窯の土台になった古墳を築窯時に築かれたマウンドと誤認し、廃棄土坑の容積計算も間違える等不備な点が多かった。今回の再検証で訂正することができたが、『概報』記述を引用していたいた研究の方々には心からお詫びをしたい。しかし、確認できた点がある反面、再検証の過程の中で、理解不能の謎が新たに出現し、茶碗山窯の実像はいまだ闇の中にある。読者の皆様様の御批判、御指導を得て、二度茶碗山に挑戦することを期して結びとしたい。

なお、本報告作成に当たり高島市教育委員会 三矢次浩氏、葛原秀雄氏、滋賀県文化財保護協会 三宅 弘氏には大変お世話になった。記して謝意を表したい。

- 註1 『今津町史 第2巻 (近世)』 今津町史編集委員会 一九九九年三月 では、茶碗山窯について地名由来の「日置前焼」としているが、本報告では『滋賀県高島郡今津町 妙見山遺跡発掘調査概要報告』今津町教育委員会平成一〇年三月二日の表記に従い「茶碗山窯」とした。
- 註2 『滋賀県高島郡今津町 妙見山遺跡発掘調査概要報告』今津町町教育委員会平成一〇年三月二日では、茶碗山窯について、本文五頁、挿図九頁、写真図版九頁分で遺構・遺物の概要を報告している。
- 註3 『概報』二六頁 5. 茶碗山窯の調査・検出された遺構・において「燃焼室の床面はやや傾斜しており、境は横狭間燃焼室の下端に土製直方体を天井まで積んで壁状の境とし、壁の下部に炎が通る孔をつくる」であるという記述をしている。「概報」では第二遺構面の存在を認識しなかつたために不十分な表現であったことを御詫びしたい。
- 註4 妙見山遺跡中の小規模な古墳には高さが一・七五メートルを測る例もある。古墳の傾斜を利用して築造した登窯としては、①石川県小松市の八幡若杉窯 藤田邦雄「若杉窯再考・八幡若杉窯から若杉窯を考える」『東洋陶磁 VOL・三七』東洋陶磁学会(二〇〇七)二〇〇八②滋賀県栗東市地山古墳窯(稲垣正宏「滋賀県栗東市地山古墳の近世窯跡について」『紀要 第一四号』財団法人滋賀県文化財保護協会 二〇〇一・三)がある。
- 註5 連房式登窯の隔壁や入口部分、近代になると窯壁や天井部分にも構築材として用いられた煉瓦状の窯材である。九州ではトンバリと呼ばれる。
- 註6 連房式登窯の隔壁(各室間の壁)には下から上がってくる炎を通す孔がある。瀬戸・美濃地方の窯では孔の場所・孔の傾斜・各室の形状を分類し、その組合せによって①有段連房横狭間式(元屋敷窯)②無段連房斜狭間式(定林寺東洞3号窯)③有段連房斜狭間式(六田第2号窯)④有段連房縦狭間式(六田1号窯)の4種類に分けている。『瀬戸市史陶磁中篇 五』四八頁 図2・8 狭間構造図 瀬戸市史編纂委員会 平成五年二月 上記の分類に該当する近世窯は県内にもある。

註7 敷板ともいう。床に敷きその上に匣鉢を載せるので、被熱により匣鉢部分以外が変色していることがある。

註8 県内窯跡では確認されていない茶碗山窯特有の窯道具で粘土塊とセットで窯壁と匣鉢間の支えとして用いられる。

註9 焼成の際、降灰や炭化材の付着により製品の器面が汚れることを防ぐために製品を入れる寸胴型の窯道具である。

註10 登窯においては燃焼室と焼成室のから燃料を入れ炊き上げる。炎はサマ孔を通って窯尻に向かって登って行くが、サマ孔が長いほど炎が圧縮され勢いよく噴出す。

註11 松本 修 『全国アホ・バカ分布考』新潮文庫 平成八年二月一日

註12 畑中英一 『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 二〇〇七年一月二六日 五七頁 「第一節 信楽焼の編年と技法」を参照させていただいた。

註13 前掲註12と同じ

註14 畑中英一 『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 二〇〇七年一月二六日 五七頁、「第一節 信楽焼の編年と技法」と二五八頁「四、信楽窯場の小地域性について」を参照させていただいた。

註15 畑中英『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 二〇〇三年二月二五日の一五頁「第三章 窯跡資料からみた中近世信楽焼の基礎研究 二五三頁、三、上田上牧村の様相」を参照させていただいた。

註16 前掲註12と同じ

註17 前掲註12と同じ

註18 滋賀県立琵琶湖博物館 里口保文 「土器表面の白色物質についての分析結果」二〇一〇年八月五日

註19 『信楽町文化財報告書 第六集 漆原c遺跡』発掘調査報告『近世信楽焼窯跡の報告』信楽町教育委員会 一九九三

・『信楽町文化財報告書 第一三集 滋賀県緊急雇用創出特別事業信楽焼古窯緊急分布調査事案 牧西遺跡・中井出遺跡・漆原d遺跡 発掘調査報告書』信楽町教育委員会 二〇〇四

・『甲賀市文化財報告書 第二集 滋賀県緊急雇用創出特別事業信楽焼古窯緊急分布調査事業 イシヤ(ハンシ)遺跡・長野東遺跡・発掘調査』甲賀市教育委員会 二〇〇五

註 20 『主要地方道八日市蒲生線道路改良事業に伴う発掘調査報告書 竹ノ鼻遺跡 蒲生郡蒲生町石塔』滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 平成一〇年二月

註 21 『野洲町文化財資料集 昭和六三年度 野洲町内遺跡発掘調査概要 一九八九・三 野洲町木教育委員会』一五頁～三三頁 第三章 大篠原南遺跡 1 岡田斉造著 第11図～第18図 図版9～図版19

註 22 古墳に築かれた窯については前掲註4に同じ。堤防を利用して築窯されたものには滋賀県大津市神領窯 稲垣正宏「大津南部地区の近世窯業の動向」『関西近世考古学研究会』『関西近世考古学研究会』一九八一がある。

註 23 『大阪市福島区萱島蔵屋敷跡 一九九八年度大坂第五地方合同庁舎建設に伴う 福島一丁目所在遺跡発掘調査報告書』一九九九・一 財団法人 大阪市文化財協会

註 24 大橋康二「わが国の窯業における生産技術の展開」『窯構造・窯技術からみた窯業・関西窯場の技術的系譜をさぐる・研究集会資料』一頁～九頁関西陶磁史研究会 二〇〇五年一月八日

註 25 畑中英一『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 二〇〇三年二月五日の二五頁(第三章 窯跡資料からみた中近世信楽焼の基礎研究 第七節 近世後期における京焼風小物生産)「①小杉碗」で小杉碗についての説明を以下のように纏めた。

碗の形状は逆台形の「杉なり」で、一八世紀半ばから一九世紀前半頃の信楽の窯跡では殆ど全くといってよい程、大量に見出すことが出来る。一八世紀前半頃の小杉碗の原形である若松文碗は一对の根引きの松が描かれていて、基本的には鋪絵でかかれるが、呉須を併せ用いるものも一定量見られる。一八世紀中場頃になると信楽でも生産が始まる。一八世紀後半になると幹・枝・松葉の区別がつかなくなり、複雑な線の集合で若松文を書こうとしており、以降、時間経過と共に複雑な線事態が省略化され、「松」とは無縁の文様になり、「杉」を描いたとしか言いようのない文様になる。一九世紀半ば以降は文様のないものが一般化する。

註 26 堀内秀樹「二 東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『シンポジウム 江

戸出土陶磁器・土器の諸問題 II 発表要旨 資料集 一九九六年二月三日 江戸陶磁土器研究グループの中で同氏の本郷構内による出土遺物の編年では、VIb期(七七〇年を中心とした時期、VII期(七八〇年代から一八〇二)になると方彫文様土瓶や植木鉢が出現する。

註 27 前掲註22に同じ。

註 28 前掲註22に同じ。

註 29 草津宿の餅屋「姥餅屋」うばがもちやぶが一八世紀の後半にはじめたと伝えられる焼物で始めは餅を載せる皿を作っていたが、後に茶道具もつくる様になった。河原正彦「近江のやきもの・近世の動向」『日本やきもの集成 6 近畿I』平凡社 一九八一年六月二日

註 30 大橋康二「わが国の窯業における生産技術の展開」『窯構造・窯技術からみた窯業・

関西窯場の技術的系譜をさぐる・研究集会資料』一頁～九頁関西陶磁史研究会 二〇〇五年一月八日

野上建紀「九谷焼生産技術の系譜 窯構造からみた」『東洋陶磁 二〇〇七・二〇〇八

VOL. 37』東洋陶磁学会 平成二〇年三月二日 発行

右記の御論考で「概報」の図面・文章を参照していただいた。

掲載図版、写真所有者および掲載図書

図1～7 (原図・写真) 高島市教育委員会

図8・9・11・13 (原図) 滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会

図10・12・14 (写真) 高島市教育委員会

図15 『信楽町文化財報告書 第六集 漆原・遺跡発掘調査報告』近世信楽焼窯跡の報告書』

信楽町教育委員会 一九九三

・『信楽町文化財報告書 第二集 滋賀県緊急雇用創出特別事業信楽焼古窯緊急分布

調査事業』 牧西遺跡・中井出遺跡・漆原田遺跡 発掘調査報告書』信楽町教育委員会

二〇〇四

- ・『甲賀市文化財報告書 第二集 滋賀県緊急雇用創出特別事業(信楽焼古窯緊急分布調査事業) イシヤ(ハンシ)遺跡・長野東遺跡・発掘調査』甲賀市教育委員会 二〇〇五
- ・『主要地方道八日市蒲生線道路改良事業に伴う発掘調査報告書 竹ノ鼻遺跡 蒲生郡蒲生町石塔』滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 平成一〇年二月
- ・『野洲町文化財資料集 昭和六三年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』一九八九・三 野洲町木教育委員会第3章 大篠原南遺跡 1 岡田斉造纂
- 図16 ・『瀬戸市史陶磁史篇 五』瀬戸市史編纂委員会 図2・8 狭間構造図 平成五年
一二月に茶碗山窯のサマ孔構造を加筆
- 図17 ・『信楽町文化財報告書 第六集 以下省略』図15に同じ
信楽町教育委員会 一九九三
- ・『甲賀市文化財報告書 第二集 以下省略』図15に同じ
- 図18 ・『主要地方道八日市蒲生線道路改良事業に伴う発掘調査報告書 以下省略』図15に同じ
『野洲町文化財資料集 以下省略』図15に同じ
漆原c窯出土針ピン製造版『信楽町文化財報告書 第六集 以下省略』図15に同じ
・上田上牧遺跡出土半球碗『捕縄整備関係遺跡発掘調査報告書 27・7 上田上牧遺跡Ⅲ 大津市上田上町 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 平成
12年3月

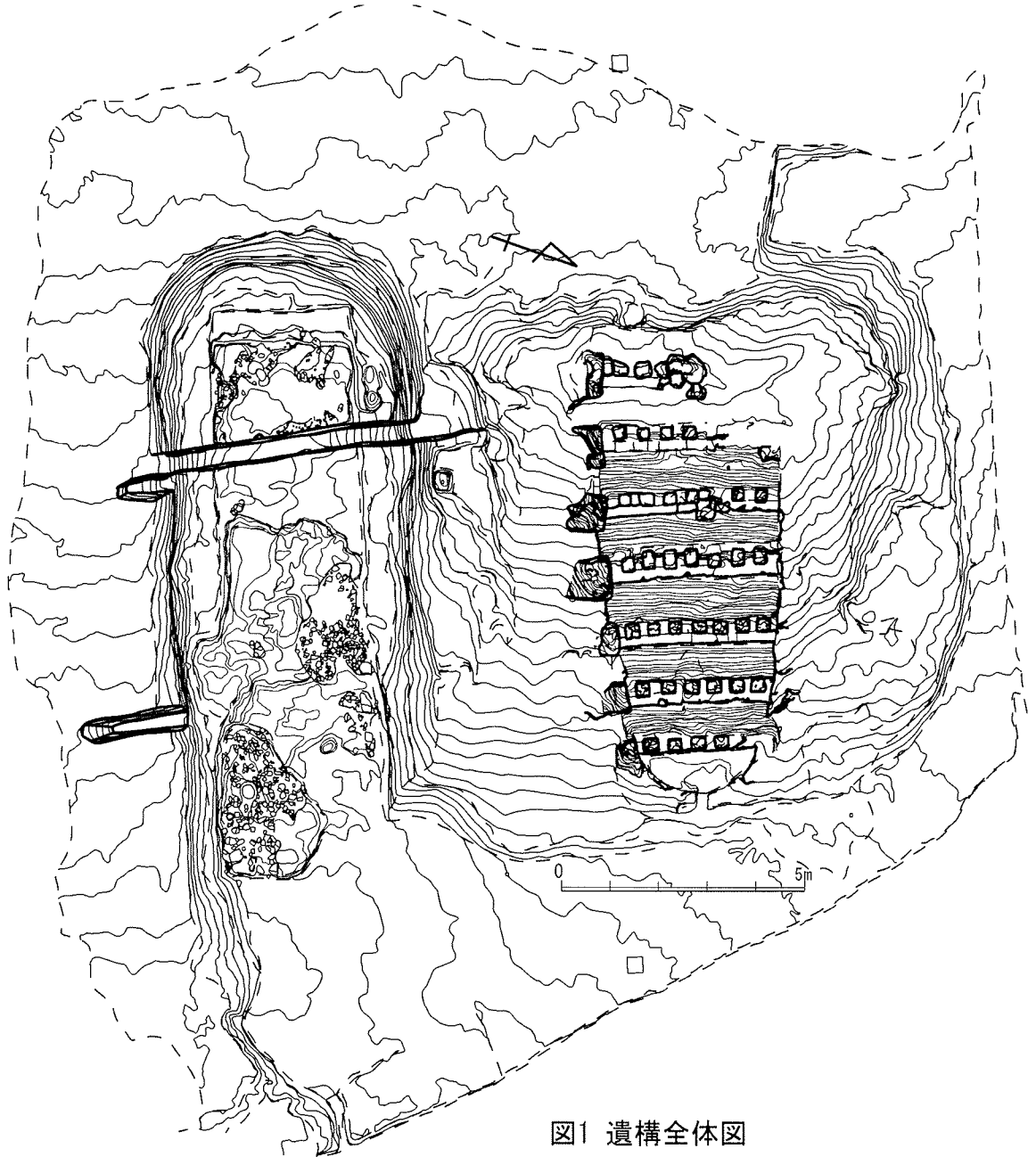


図1 遺構全体図

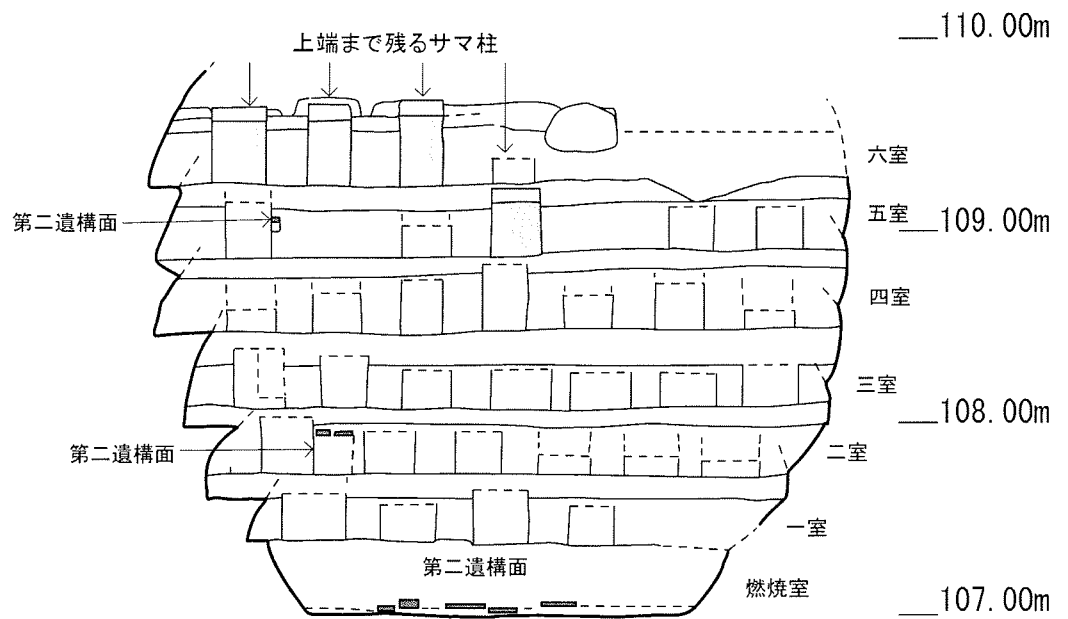


図2 連房立面図

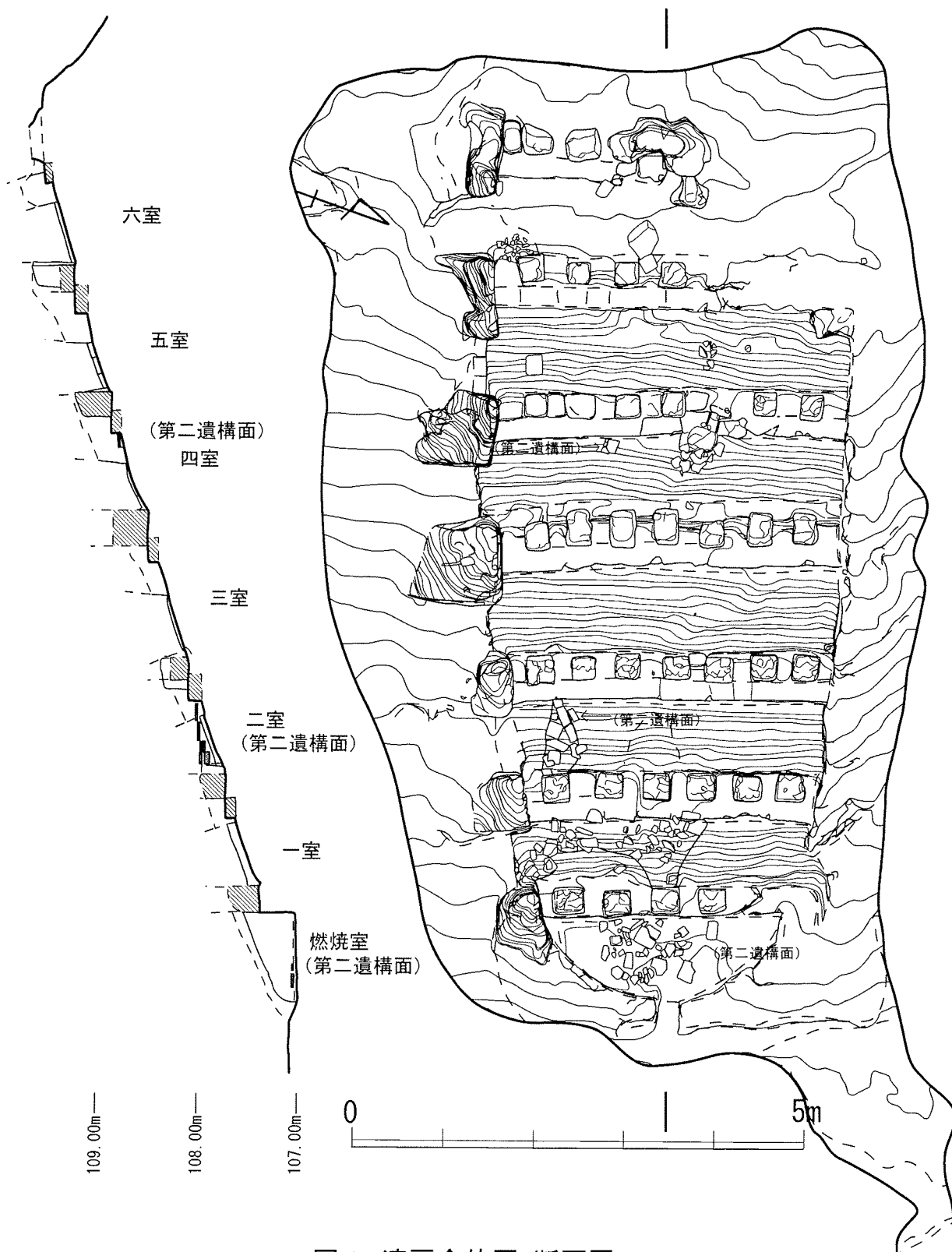


図3 連房全体図・断面図

※ トーンは第二遺構面



妙見山遺跡群遠景(中央は窯跡)



茶碗山窯連房式登窯(右)廃棄土坑(左)



連房式登窯 - 北から -



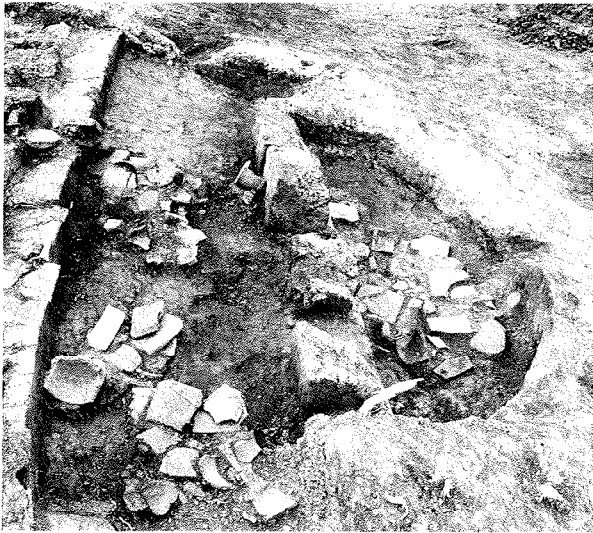
登窯第一遺構面



登窯第二遺構面



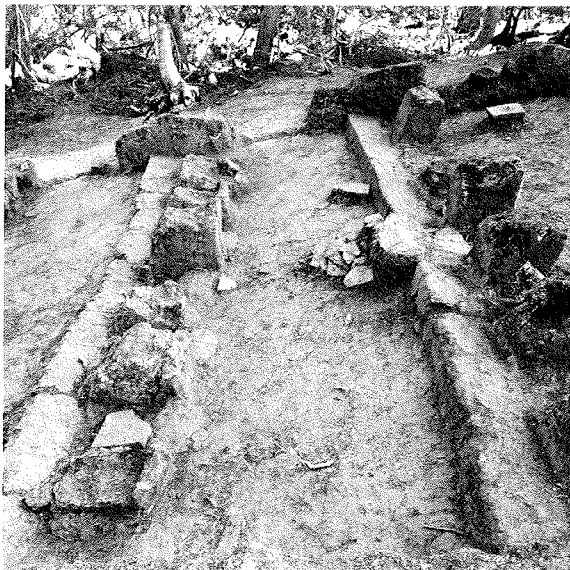
燃烧室(第二遺構面)



燃烧室・一室(第二遺構面)



二室-開口部から - (第二遺構面)



四室 - 奥から - (第二遺構面)



六室 - 奥から - (第二遺構面)



5室開口部



廃棄土坑包含層最下層遺物出土状況



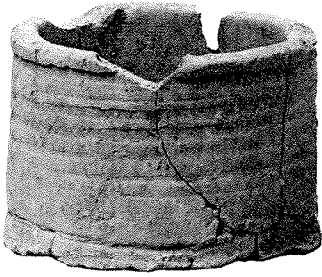
40



41



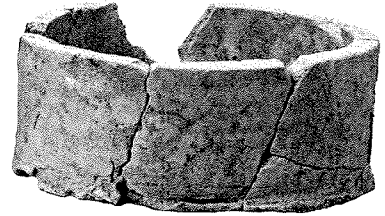
42



43



44



45

匣鉢



46



49



48

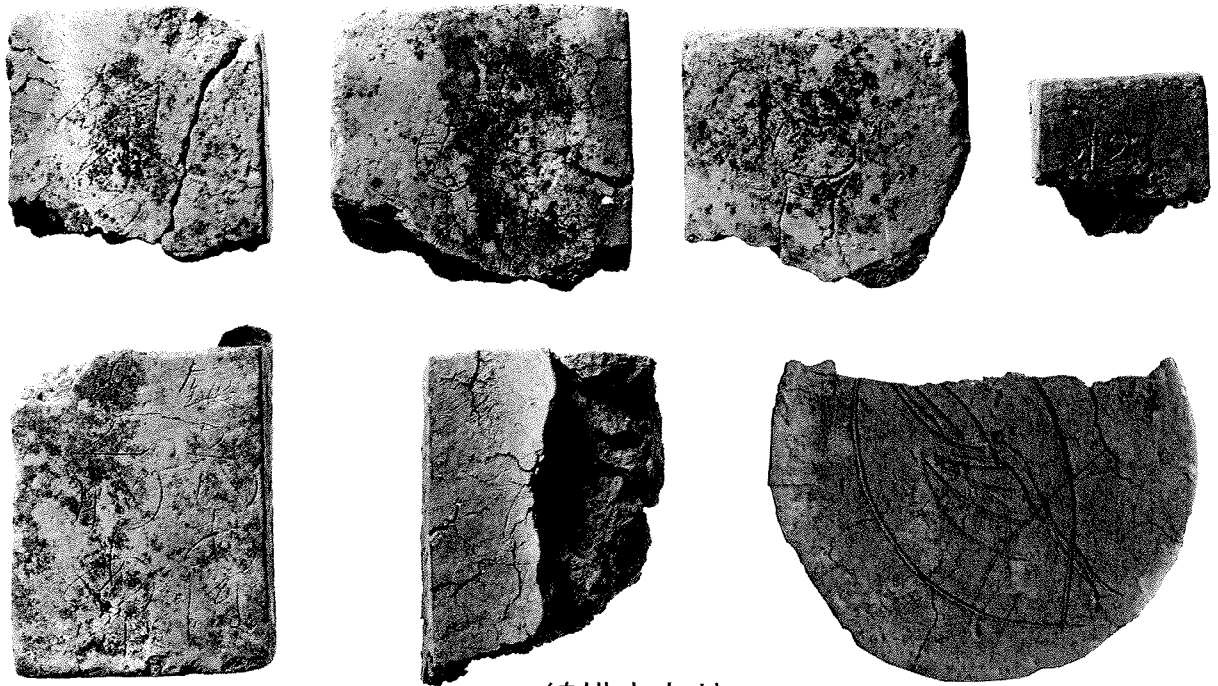


47

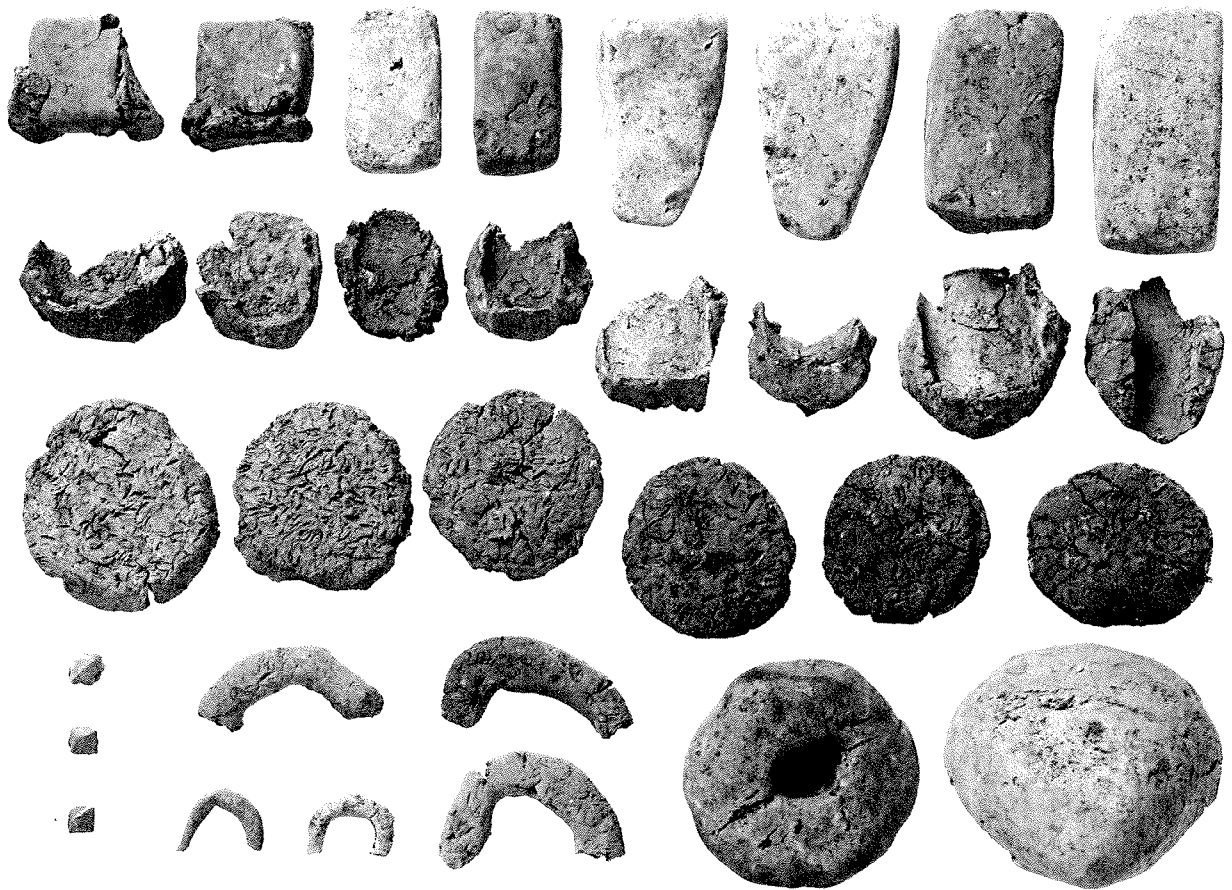


板

図6 遺物写真1

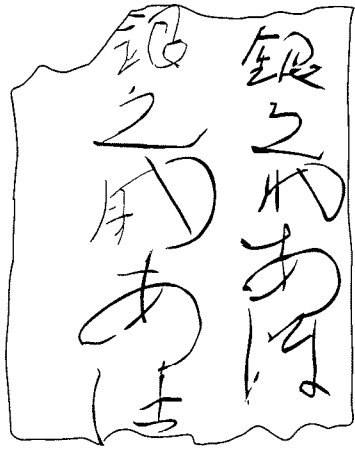


線描き有り



その他の窯道具

図7 遺物写真2



線 2



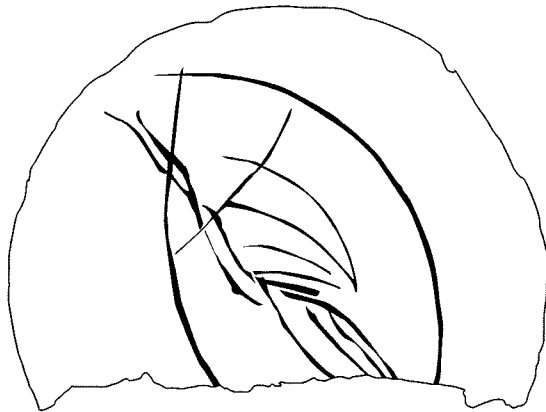
線 1



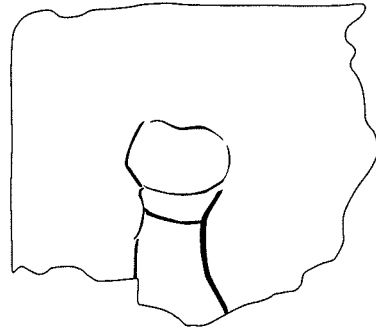
線 4



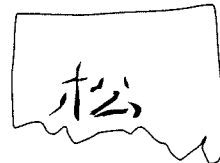
線 3



線 5



線 6



線 7

図 8 窯道具線描き S=1/2

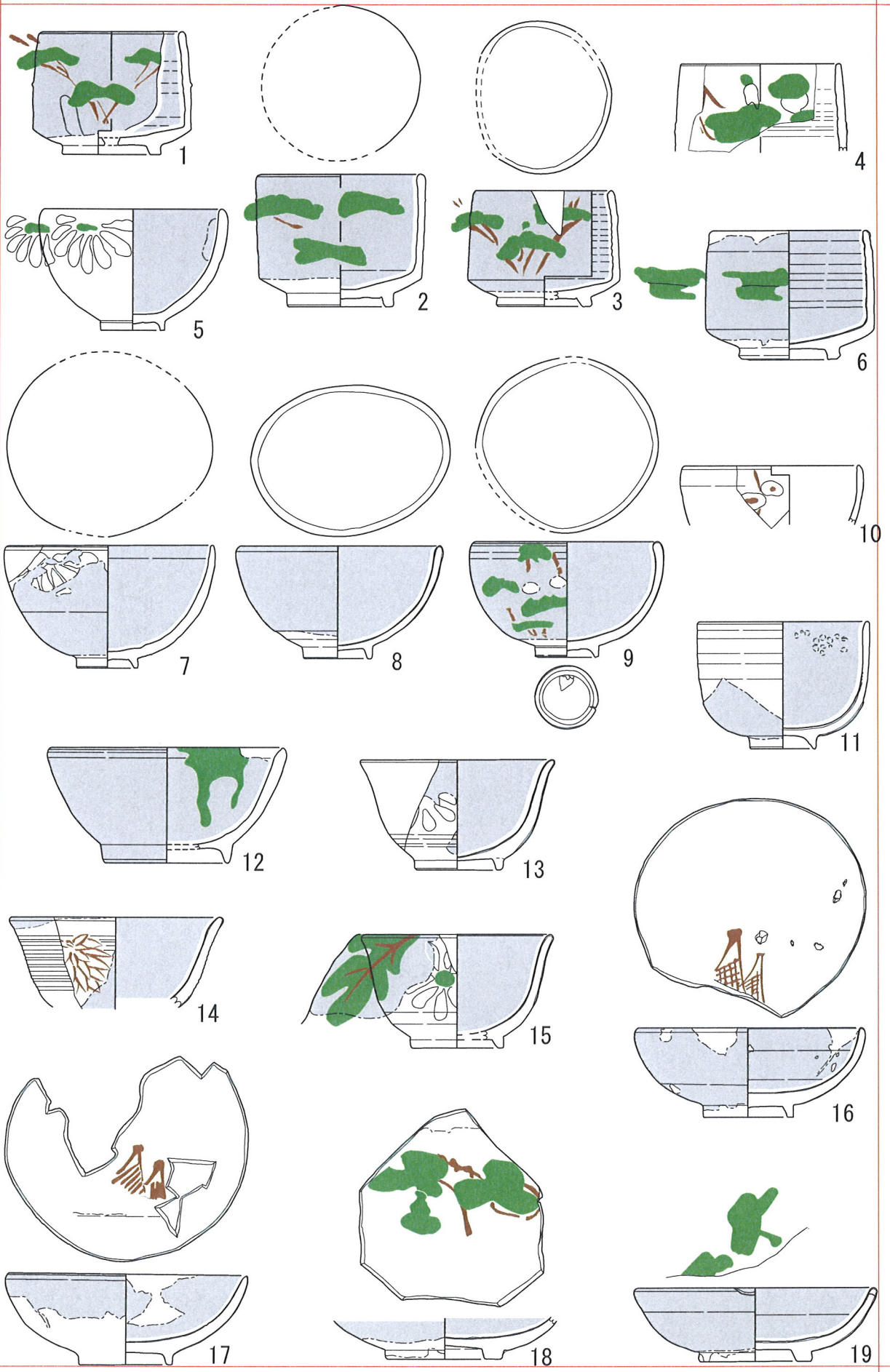


图9 遺物実測図 一

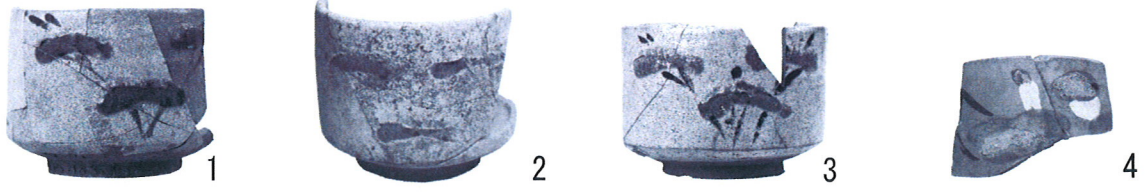


图10 遺物写真3

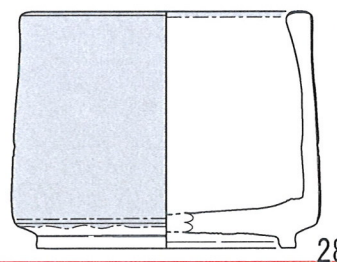
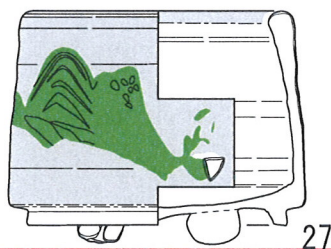
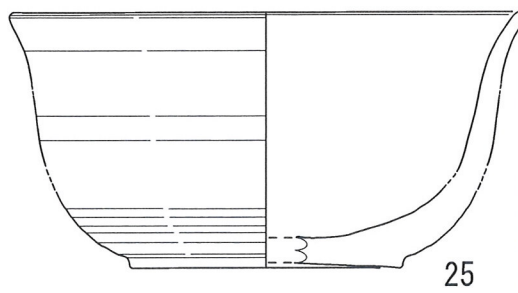
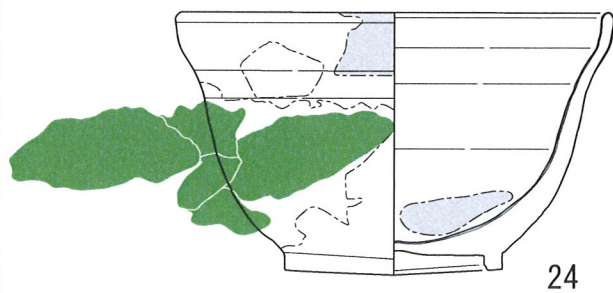
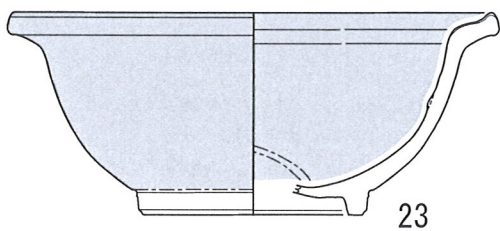
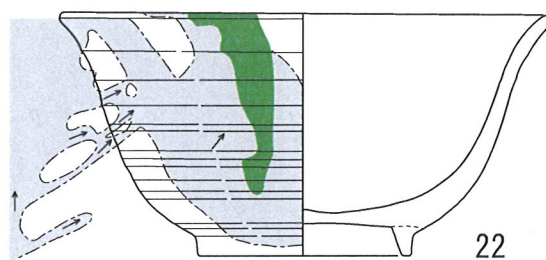
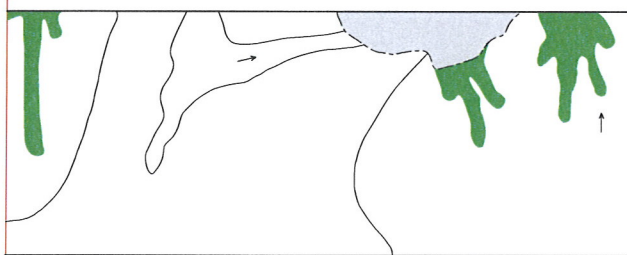
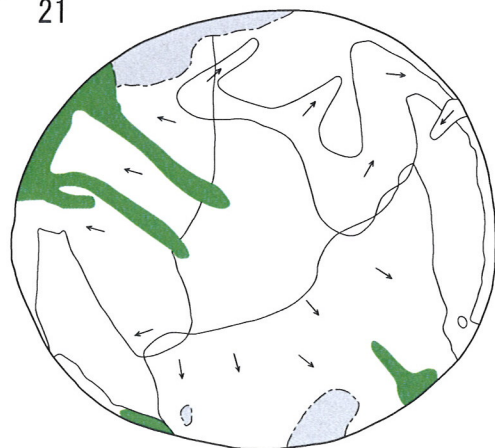
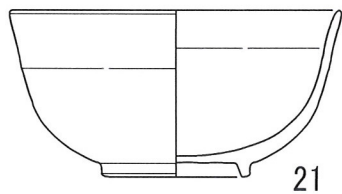
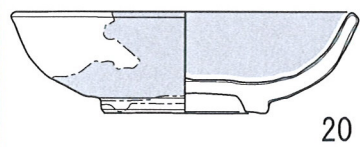
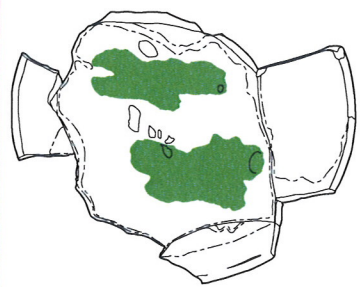


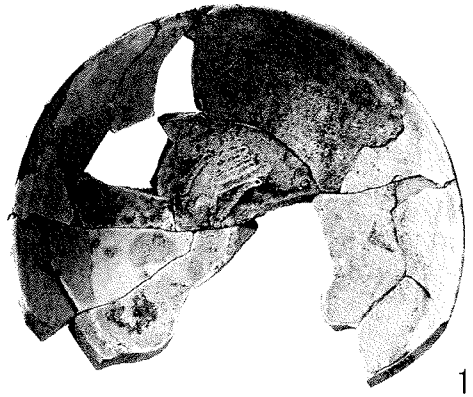
图11 遺物実測図二



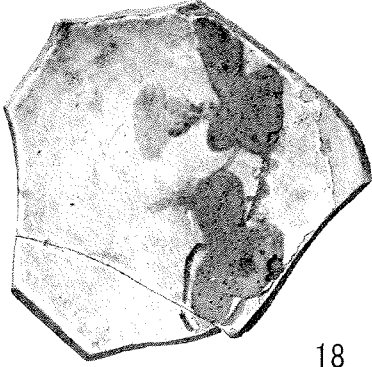
14



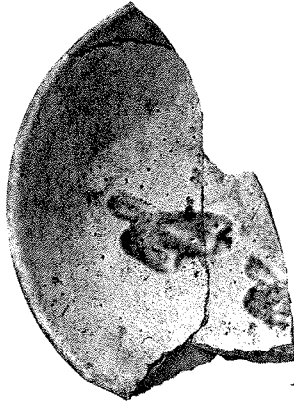
15



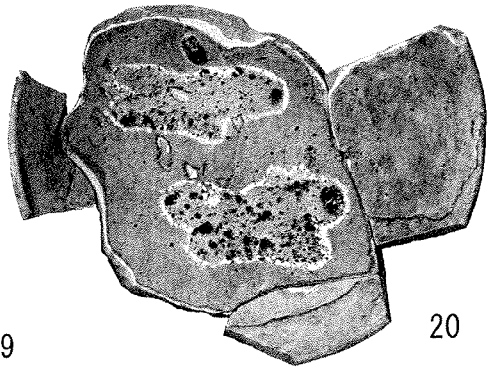
17



18

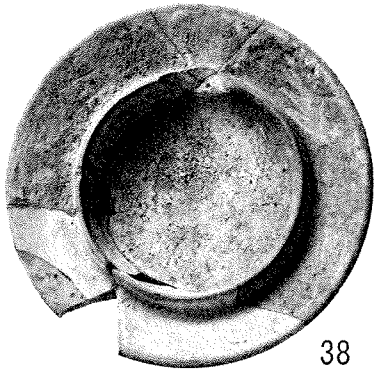


19

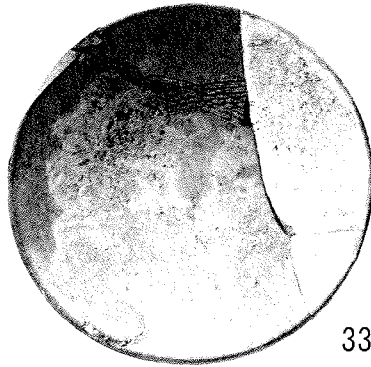


20

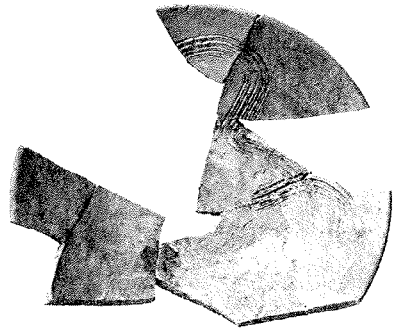
端反碗深皿



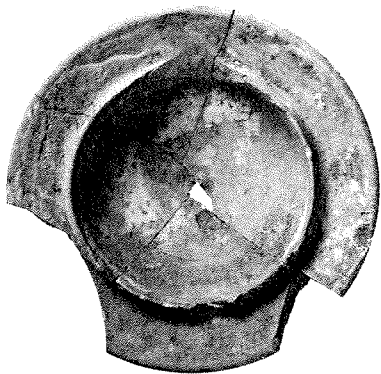
38



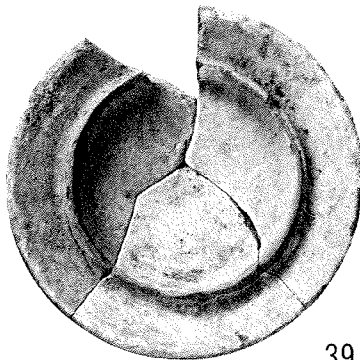
33



37



39



36

灯明皿

图12 遺物写真4

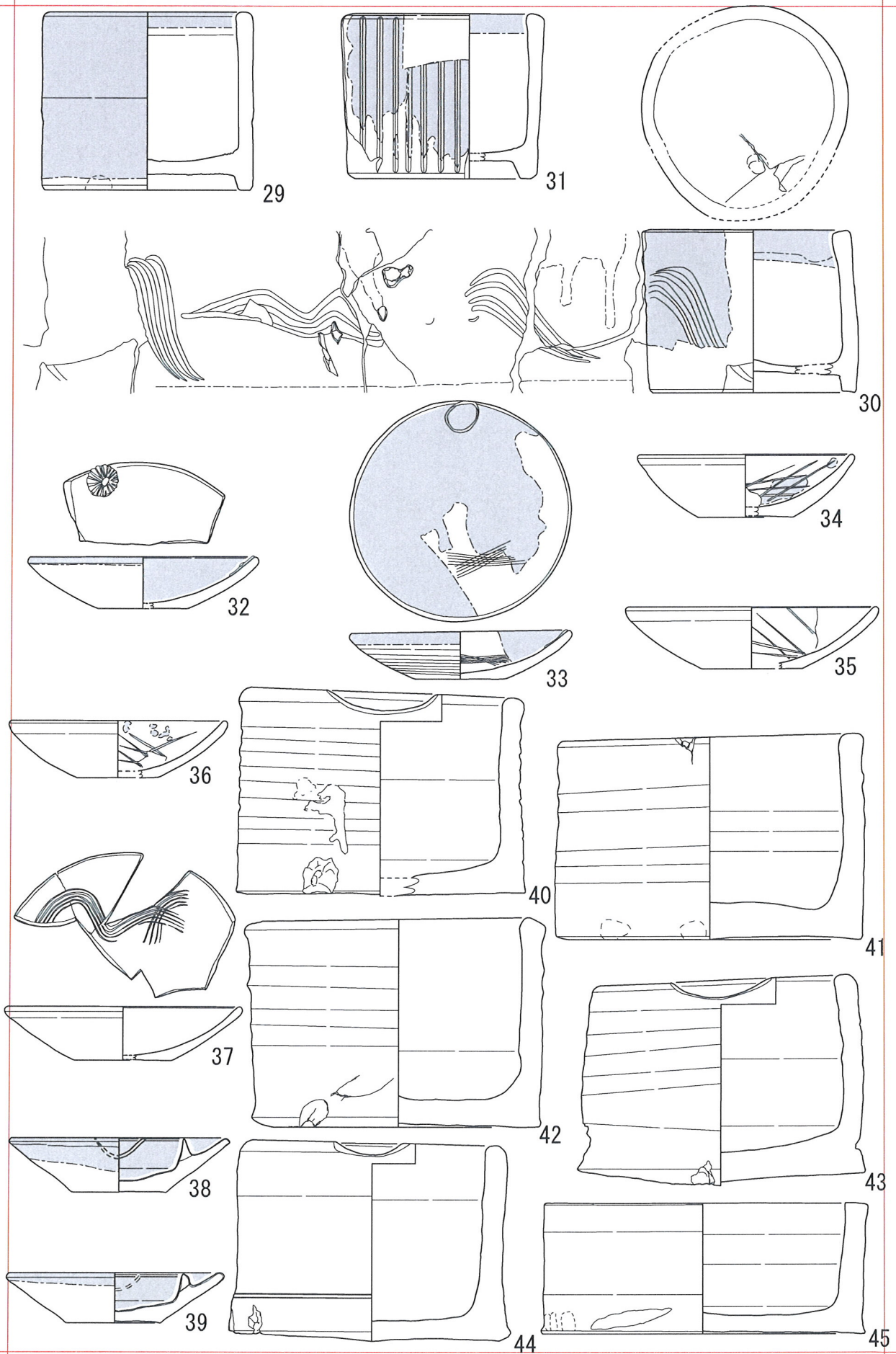
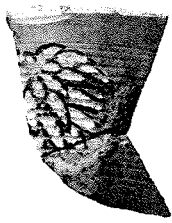


图13 遺物実測図三



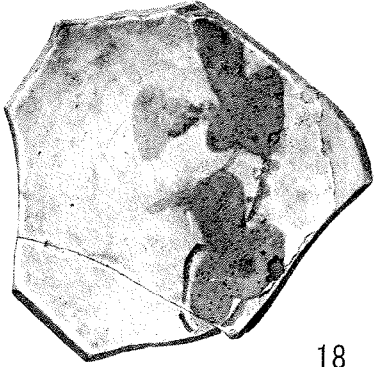
14



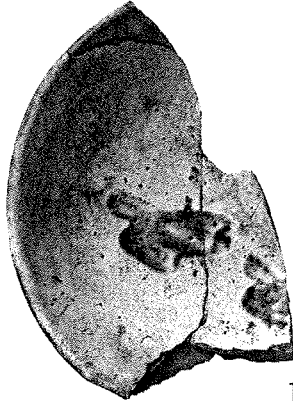
15



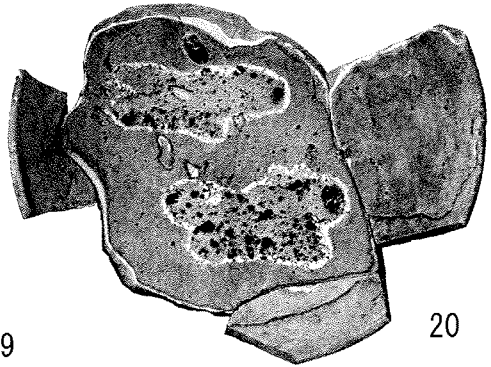
17



18

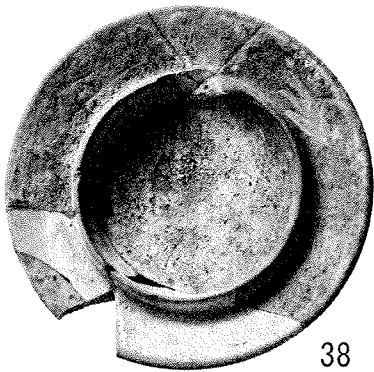


19

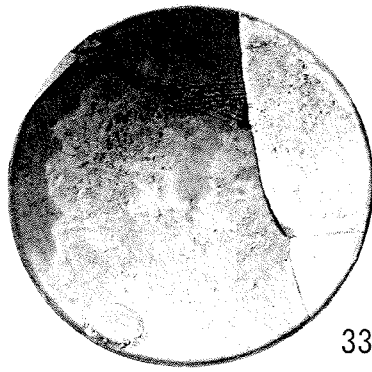


20

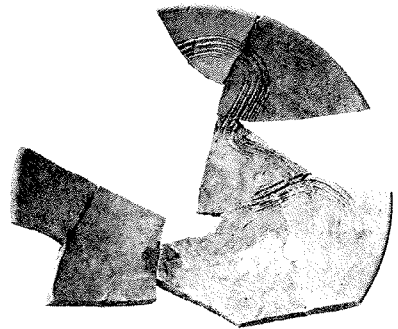
端反碗深皿



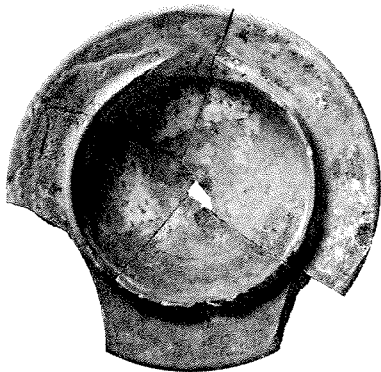
38



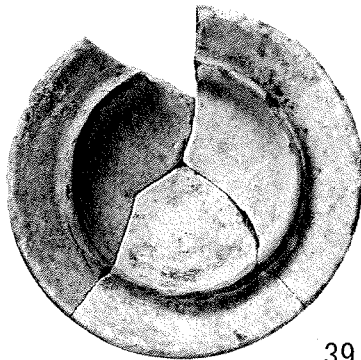
33



37



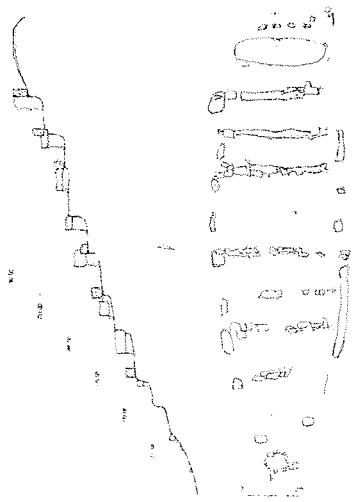
39



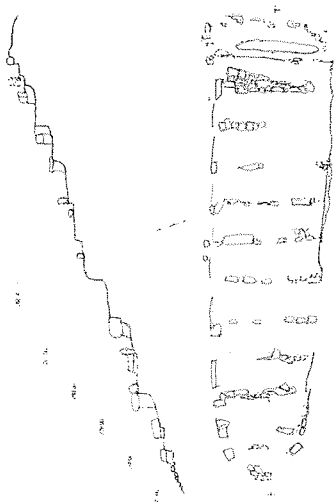
36

灯明皿

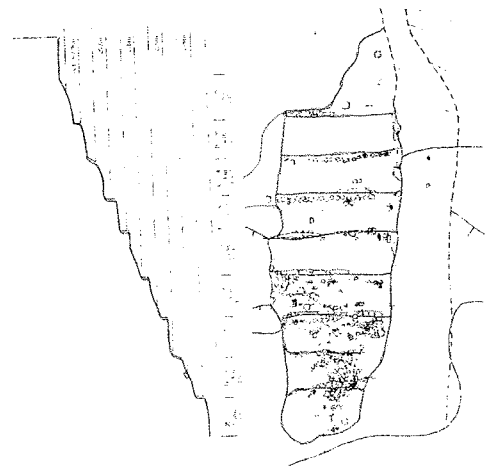
图14 遺物写真5



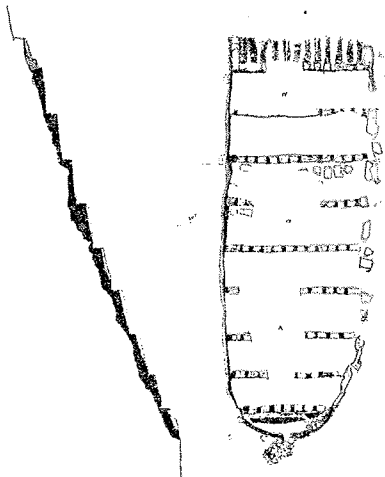
牧西2号窯



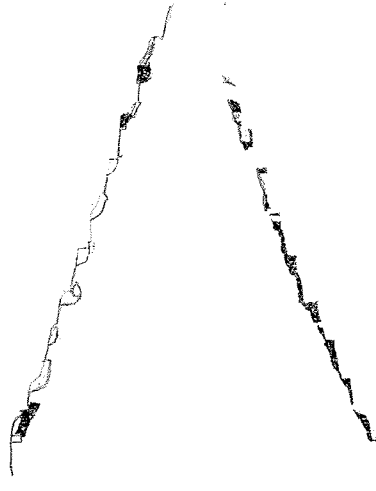
牧西3号窯



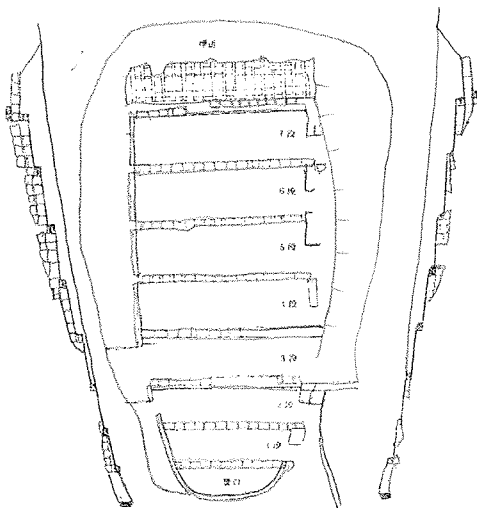
漆原C窯



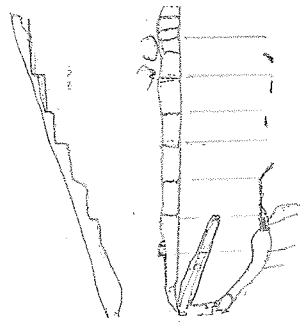
長野東出1号窯



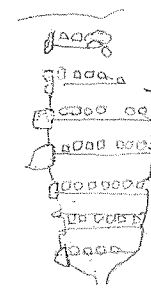
長野東出2号窯



岡田斉造窯

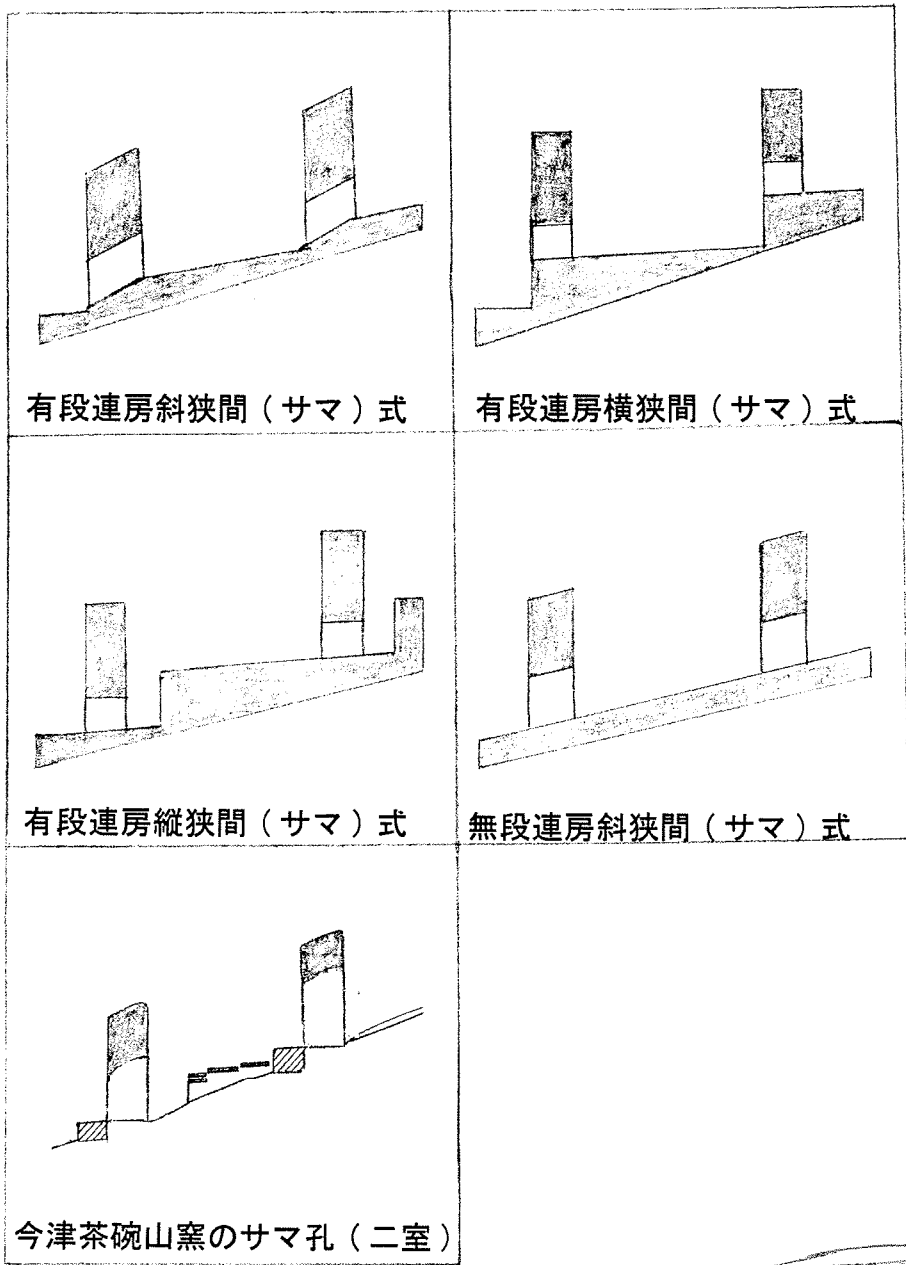


石塔窯

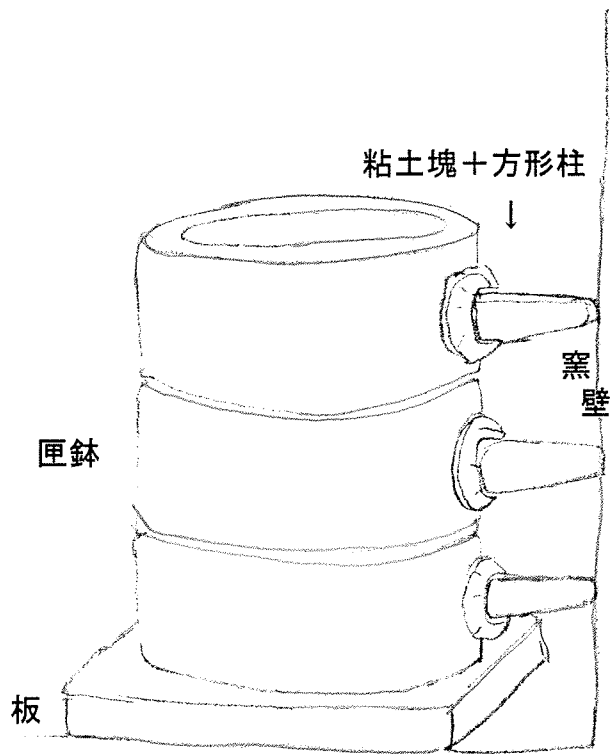


今津茶碗山窯

图15 滋賀県内中・近世窯跡図 縮尺同一



サマ孔の比較図



粘土塊+方形柱の使用法 (想像図)

図 16 サマ孔の比較図 粘土塊+方形柱の使用法 (想像図)

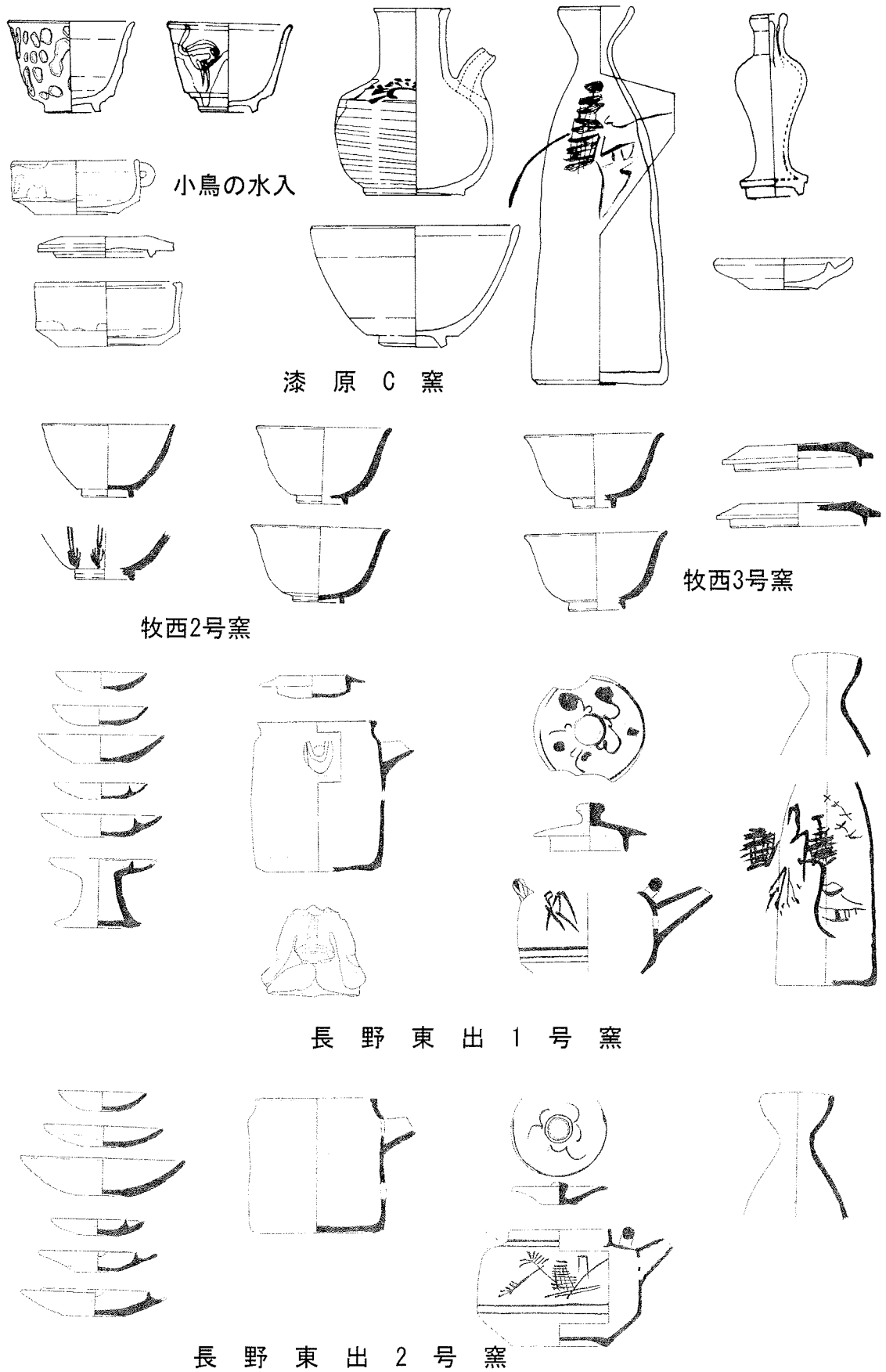
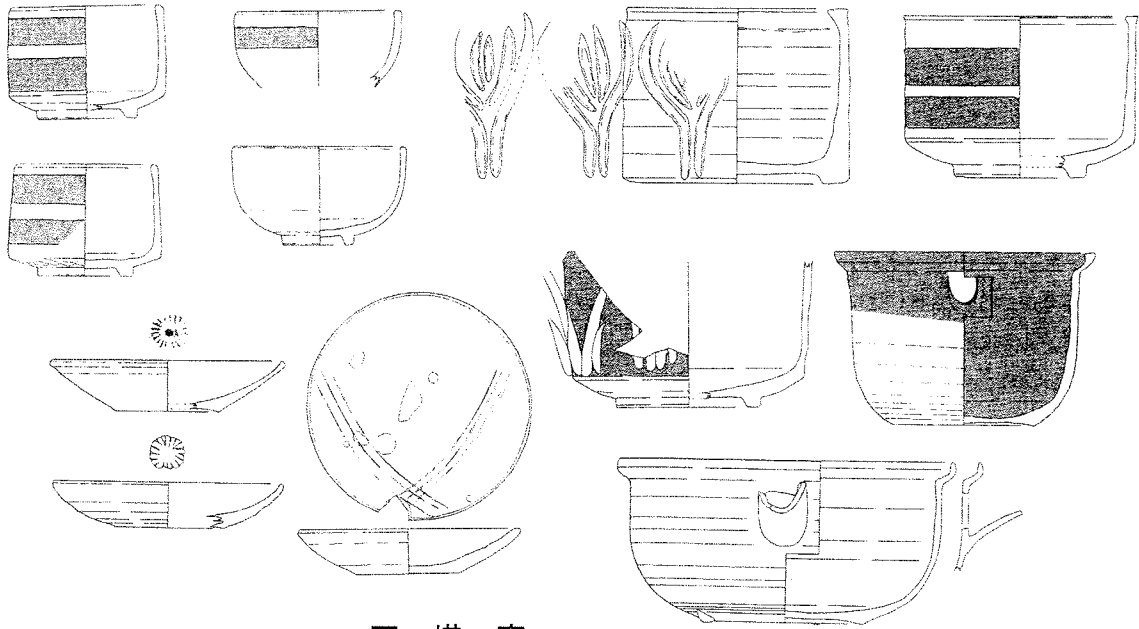


図17 滋賀県内窯跡出土遺物実測図 1 S=1/4

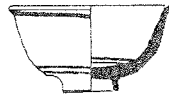


石塔窯

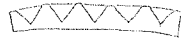
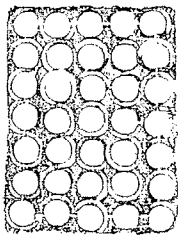
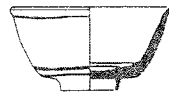
仁保寺手物塩魚唐



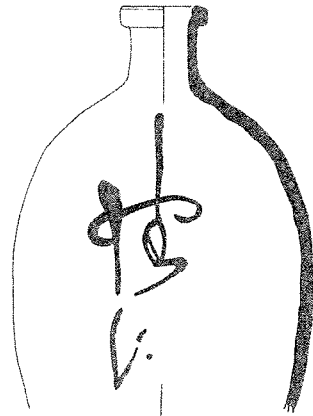
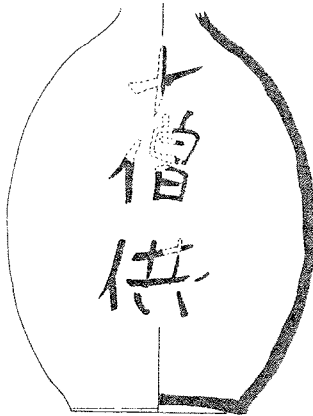
仁保寺手物穀恒



仁保寺手物塩魚唐



0 10CM



明治六年
西二月中旬
牧村中西八持

岡田齊造窯

漆原C窯出土針ピン製造判

場所/製品	窯道具	製品
連房		
焚口	158	523
1室	339	4
2室	503	172
3室	825	477
4室	759	63
5室	447	5
6室	659	17
合計	3,690	1,261
廃棄土坑		
上層	1461	256
下層	825	827
合計	2,286	1,083
周辺		
3室南斜面	549	2,910
その他	245	251
合計	794	3,161
総計	<u>6,770</u>	<u>5,505</u>

表1 遺構別出土遺物

連房窯道具

場所/器種	匣鉢	板	方形柱	ワド子	粉痕円盤	煉瓦	粘土塊	窯壁	その他
焚口	103	40	13				2		
1室	251	55	19	1		4	9		
2室	388	58	22	5	2	1	24		3
3室	584	39	50	5	2		45	50	50
4室	647	80	19				13		
5室	442	2	1				2		
6室	646	2	1			5			5
合計	3,061	276	125	11	4	10	95	50	58
総計	3,690								

廃棄土坑窯道具

場所/器種	匣鉢	板	方形柱	ワド子	粉痕円盤	煉瓦	粘土塊	窯壁	その他
上層	1,287	65	28	0	7	10	49	0	15
下層	736	10	11	1	5	3	12	5	42
合計	2,023	75	39	1	12	13	61	5	57
総計	2,286								

周辺窯道具

場所/器種	匣鉢	板	方形柱	ワド子	粉痕円盤	煉瓦	粘土塊	窯壁	その他
3室南斜面	427	20	11	2	1	0	73	0	15
その他	212	11	1	0	1	1	10	0	9
合計	639	31	12	2	2	1	83	0	24
総計	794								

窯道具合計	5,723	382	176	14	18	24	239	55	139
総合計	6,770								

連房製品

場所/器種	筒碗	半球碗	端反碗	碗	鉢	香炉	灯明皿	灯明台	深皿	壺	その他
焚口	14	441	1	24			19	7			17
1室				3			1				
2室	5	15	1	128	1		19	3			
3室	42	3	2	51	3	5	57	13		1	300
4室		13	2	3	3			1			41
5室				3						2	
6室				2		1					14
合計	61	472	6	214	7	6	96	24	0	3	372
総計	1,261										

廃棄土坑製品

場所/器種	筒碗	半球碗	端反碗	碗	鉢	香炉	灯明皿	灯明台	深皿	壺	その他
上層	2	0	1	22	0	1	12	4	0	0	1
下層	43	37	9	415	209	11	70	28	9	0	209
合計	45	37	10	437	209	12	82	32	9	0	210
総計	1,083										

周辺製品

場所/器種	筒碗	半球碗	端反碗	碗	鉢	香炉	灯明皿	灯明台	深皿	壺	その他
3室南斜面	151	81	8	61	1	29	378	144	4	0	2,053
その他	12	26	1	65	7	5	17	30	0	0	88
合計	163	107	9	126	8	34	395	174	4	0	2,141
総計	3,161										

製品合計	269	616	25	777	224	52	573	230	13	3	2,723
総合計	5,505										

表2 遺構出土遺物器種別一覧

場所/法量 数量	口径											総計	
	10.3	13.0	14.0	14.2	14.5	15.0	16.0	16.5	17.0	17.5	18.0		
連房中			7		1	6	23	2	3	2		44	
廃棄土坑	1	1	1	1	3	6	7					20	
窯跡周辺			1			3	2					6	
合計		1	1	9	1	4	15	32	2	3	2	0	70

場所/法量 数量	底径											総計
	10.3	13.0	14.0	14.2	14.5	15.0	16.0	16.5	17.0	17.5	18.0	
連房中		1	6		2	24	32	3	10		3	81
廃棄土坑			6		4	10	12		10		3	45
窯跡周辺			2			3	4					9
合計		1	14	0	6	37	48	3	20	0	6	135

表3 出土匣鉢口径・底径一覧表

粘土塊一覧表(窯跡)

粘土塊一覧表(連房)

場所／種類	方形柱痕	匣鉢痕	両方	なし	個数
焚口	1	0	0	1	2
1室	4	0	0	3	7
2室	21	9	9	3	24
3室	28	15	7	7	43
4室	0	5	0	8	13
5室	0	0	0	2	2
合計	54	29	16	24	91

粘土塊一覧表(廃棄土坑)

場所／種類	方形柱痕	匣鉢痕	両方	なし	個数
上層	21	32	21	53	85
下層	1	1	1	11	12
合計	22	33	22	64	97

粘土塊一覧表(周辺)

場所／種類	方形柱痕	匣鉢痕	両方	なし	個数
3室南斜面	12	9	6	48	63
その他	0	1	0	3	4
合計	12	10	6	51	67

総計 88 72 44 139 255

表5 粘土塊一覧表

番号	名称	所在地	年代	全長	最大幅	全体勾配	室別法量								サマ穴構造		
							室番	奥行	幅	勾配°	床面	床砂	床面積	段差		サマ柱数	サマ穴高さ
2	牧西2号	甲賀市信楽町牧	18世紀第3四半期	16.0	4.60	21.0	燃烧室	0.7	0.7		不明	不明	0.490	0.20			横サマ
							1	1.20	不明	5	不明	不明	不明	0.20			
							2	1.80	1.80	5	不明	不明	3.240	0.40			
							3	2.30		5	不明	不明	0.000	0.50			
							4	3.50	1.20	5	不明	不明	4.200	0.50		0.4	
							5	3.80	1.00	5	不明	不明	3.800	0.30			
							6	4.00	1.20	5	不明	不明	4.800	0.50		0.2	
							7	4.00	1.10	5	不明	不明	4.400	0.50		0.25	
							8	4.20	1.20	5	不明	不明	5.040	0.20	7	0.25	
							9	4.00	0.95	5	不明	不明	3.800	0.70		0.25	
						10	3.90	1.10	5	不明	不明	4.290	0.50		0.35		
3	牧西3号	甲賀市信楽町牧	18世紀第3四半期	16.2	4.60	22.0	燃烧室	0.30	0.20		不明	不明	0.060				横サマ
							1	1.90	0.50	5	不明	不明	0.950	0.35			
							2	2.40	0.50	5	不明	不明	1.200	0.20			
							3	2.80	1.00	5	不明	不明	2.800	0.40			
							4	3.10	1.00	5	不明	不明	3.100	0.10			
							5	3.20	1.10	5	不明	不明	3.520	0.30			
							6	3.50	1.30	5	不明	不明	4.550	0.60			
							7	3.50	1.00	5	不明	不明	3.500	0.30			
							8	3.70	1.10	5	不明	不明	4.070	0.20			
							9	3.85	1.10	5	不明	不明	4.235	0.50			
							10	4.00	1.20	5	不明	不明	4.800	0.45			
							11	3.90	1.00	5	不明	不明	3.900	0.25			
12	3.90	0.80	5	不明	不明	3.120	0.20										
4	漆原C	甲賀市信楽町牧	明治6年銘の窯具有	12.78	4.40	21.0	燃烧室	2.70	1.38		不明	不明	3.726	0.30			横サマ
							H	3.43	1.35		不明	不明	4.631	0.40			
							G	3.75	1.41		不明	不明	5.288	0.25			
							F	4.20	1.41		不明	不明	5.922	0.30			
							E	4.35	1.73		不明	不明	7.526	0.35			
							D	4.23	1.11		不明	不明	4.695	0.45			
							C	4.38	1.35		不明	不明	5.913	0.30			
							B	4.00	1.23	10	不明	不明	4.920	0.30			
A	3.75	1.62		不明	不明	6.075											
4	長野東出1	甲賀市信楽町長野	19世紀前葉	14.10	5.50	20.0	燃烧室	2.80	0.80				2.240	0.50	7		横サマ
							1	4.00	0.90	8	煉瓦	砂	3.600	0.50			
							2	4.50	1.15	6.5	煉瓦	砂	5.175	0.50			
							3	4.60	1.30	8	煉瓦	砂	5.980	0.50			
							4	4.65	1.20	11	煉瓦	砂	5.580	0.50	11		
							5	4.70	1.30	7.5	煉瓦	砂	6.110	0.50			
							6	4.70	1.20	3.5	煉瓦	砂	5.640	0.50	13		
							7	4.80	1.30	3.5	煉瓦	砂	6.240	0.50	13		
8	4.80	1.20	3.5	煉瓦	砂	5.760	0.50	12									
5	長野東出1	甲賀市信楽町長野	19世紀前葉	14.3	5.7	20.0	燃烧室	2.50	0.50				1.250	0.50			横サマ
							1	3.20	2.70	5.0	煉瓦	砂	8.640	0.50	6		
							2	3.70	1.10	4.5	煉瓦	砂	4.070	0.50	7		
							3	4.40	1.10	11.5	煉瓦	砂	4.840	0.50			
							4	4.50	1.20	10.5	煉瓦	砂	5.400	0.50	12		
							5	4.40	1.20	9.5	煉瓦	砂	5.280	0.50			
							6	4.30	1.20	9.0	煉瓦	砂	5.160	0.50			
							7	4.50	1.10	8.5	煉瓦	砂	4.950	0.50			
8	4.20	1.10	10.5	煉瓦	砂	4.620	0.50										

表6-1 滋賀県内発掘調査実施近世・近代窯跡一覧

番号	名称	所在地	年代	全長	最大幅	全体勾配	室別法量								サマ穴構造		
							室番	奥行	幅	勾配°	床面	床砂	床面積	段差		サマ柱数	サマ穴高さ
6	今津茶碗山 第一遺構面	高島市 今津町 日置前	19世紀	9.0	3.7	15.5	燃烧室	2.4	0.8	0.0	黒変有	有	1.920	0.35	5		第2遺構面有
							1	2.82	0.82	20	黒変有	有	2.312	0.10	6		
							2	3.10	0.92	20	黒変有	有	2.852	0.14	6		第2遺構面有
							3	3.40	1.10	15	黒変有	有	3.740	0.12	7		
							4	3.50	0.92	19	黒変有	有	3.220	0.09	7	0.34	
							5	3.55	1.0	16	黒変有	有	3.550	0.13	7	0.41	第2遺構面有
	6		0.82	14	黒変有	有	0.000		7								
	今津茶碗山 第二遺構面	燃烧室	2.4	0.8	0	かさ上げ	有	1.920	0.30	5		3cmかさ上げ					
		2	3.10	0.92	0	かさ上げ	有	2.852	0.08	6		3~15cmかさ上げ					
5		3.55	1.0	0	かさ上げ	有	3.550	0.07	7		6cmかさ上げ						
7	石塔	東近江市 石塔	18世紀後半	10.8	3.6	20	1	2.90	1.20	4.0	不明	不明	3.480	0.30			横サマ
							2	2.85	1.20	3.0	不明	不明	3.420	0.50			
							3	2.90	1.20	8.0	不明	不明	3.480	0.35			
							4	3.00	1.10	4.5	不明	不明	3.300	0.30			
							5	3.10	1.25	5.0	不明	不明	3.875	0.30			
							6	2.90	1.25	2.5	不明	不明	3.625				
							7				不明	不明					
8	岡田齊造	野洲市 小堤	明治30~40年代	13.5	5.5	14.0	燃烧室	1.10	3.80	29.0	張床	砂	4.180	0.20			横サマ
							1	1.00	4.20	10.0	張床	砂	4.200	0.20	12		
							2	1.10	5.00	7.5	張床	砂	5.500	0.25	16		
							3	1.40	6.10	9.0	張床	砂	8.540	0.23			
							4	1.70	5.80	10.5	張床	砂	9.860	0.25			
							5	1.70	5.80	6.5	張床	砂	9.860	0.30			
							6	1.70	5.80	7.0	張床	砂	9.860	0.30			
							7	1.70	5.80	6.0	張床	砂	9.860	0.30	18		
9	土ヶ森	越前市 武生池ノ上		8.5	2.90	25.0	燃烧室	2.10	1.30	30.0	黒変有	砂	2.730		6		斜めサマ
							1	2.20	0.85	10.0	黒変有	砂	1.870		6		
							2	2.30	0.90	10.0	黒変有	砂	2.070		6		
							3	2.40	1.00	10.0	黒変有	砂	2.400		7		
							4	2.60	0.70	10.0	黒変有	砂	1.820		7		
							5	2.90	0.60	10.0	黒変有	砂	1.740		8		
							6	2.90	0.90	10.0	黒変有	砂	2.610		7		
							7	3.05	0.60	10.0	黒変有	砂	1.830		8		

表6-2 滋賀県内発掘調査実施近世・近代窯跡一覧

場所/器種	食器								調理具				煮炊具			貯蔵具			灯火具				その他日用品													
	筒碗	半球碗	端反碗	小杉碗	平碗	小杯	鉢	皿	深皿	醤油差	水差	德利	鉢	播鉢	急須	土鍋	土瓶	壺	蓋物	灯皿	灯台	平仄	その他の灯具	佛具	香炉	花器	その他の灯具	人形	植木鉢	小鳥の水入れ	火鉢	蓋物				
今津茶碗山	○	○	○			○		○										○		○																
牧西2号(信楽)			○	○															○		○															
牧西3号(信楽)			○	○																																
漆原C(信楽)		○		○	○	○	○		○		○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○		○				
長野東出1(第2群)							○	○	○	○	○	○	○	○						○	○	○	○	○												
長野東出2(第2群)								○												○	○	○	○	○												
石塔窯	○	○	○													○	○			○	○	○	○	○												
岡田斎造窯			○																																	
堂島窯		○			○															○	○	○	○	○												○

表7-2 滋賀県内諸窯出土製品一覧